

4M25

大我居士著

叢書  
日本  
貧天地  
饑寒窟  
探檢記

全

發兌 日本新聞社

369.15

D15h

序

東都の壯觀を説くものは多し、坂府の繁榮を語るものは多し、而して東西の二大都府に如何なる暗黒世界の存するやを知るものは少し。

友人大我居士義に勇むの士なり、世に最良の士ありべきもの、真相を寫さんと欲し身を變して東都坂府の最も暗黒なる世界に向て去れり。

九死一生を得て歸來居士の日記は『日本』の紙上に公にせられ、肉食者の鐵鞭として世に行はれたり。

今又た纂して以て一卷と爲す、實に世上肉食の徒を警



33726

二  
むるのみにはあらず、政治家の眼光が之に依て社界の  
最下層に注がんとを祈るの微意も亦た存せり。

明治癸巳初夏

一 念 識

## 序

年豊かあれども見は飢に泣き、冬暖かなれども妻は寒に叫ぶ、此の憐なる状態の年を逐ふて増加するは今日の勢なり、法律の發布は年に百を以て數へられ、日に完備の体裁をなせども、此無告の民を救はず、官吏の俸給は豫算毎に増加すれども、此無告の民は與らず、況んや堂々たる駟馬に鞭つ貴紳の宴會は、一夕數千金を費し、銀燭殿に輝き、玉鏤堂に満つるも、其殘肴冷杯争かてか此無告の民に及はん、揚々たる富商の別墅は、朝野の英豪を集め、花牌坐に敷き、絃聲院を漏るゝも、其歡樂墮笑は此無告の民に被らず、蓬頭垢面、肉破れ骨出で、歩脚踉蹌、氣息奄々、路頭にさまよふ一種の兄弟姉妹は、何ぞ其れ不幸なる。

世に慈善家なるものありて、慈善の各新聞紙上に行はることあれども、其惠澤は現はれたる事件にのみ及んで、此の無告の境涯には及はず、世に義俠者なるものありて義俠の名社會に噪けども、其の俠義は有名なる遭難者杯にのみ施されて、日蔭の者には被らず。彼等は固より盡く生れなから窮民のみに非らず、浮世の生存競争に失敗し、衰れにも人生の行路難を行き盡して、悲惨なる境涯に陥れり其始は多少の土地をも有し、變許の商賣も行ひしものが、富の分配に平均を失ひ、或は意外なる人世の變故に衝突し、一轉して小作人となり、力役者となり、再轉して困頓流離、饑と寒とに責めら

るゝに至れるなり。固より無数の饑寒社會には、自個の懶惰失敗よりして此惡果を受納せし族も少からざれども、其多數は此の如き不幸の命運を受けしものなり、其證據には彼等が現在饑と寒とに賣められても、猶ほ自ら甘んじて盜賊の群にも入らず、暴民の仲間にも加らず、自己の腕と脛とに頼りて衣食せんとするにても知らるゝし。若し神ありて浮生の外装即ち衣食住の風采を一剝するともあらば彼等の心事は、寧ろ彼の金衣玉食、駟馬に跨り、宏廈に住する紳士紳商よりも潔白なるもあらん。見よ、暗夜哀を乞ふて白晝人に驕り、劣者の膏血を絞りにて自己の脂肪を肥やす奴原の面惡くさを。

五六年前の事と覺ゆ、一種輕薄の説行政社會に行はれて、乞食放逐令なるもの各地に實行されたり。此説に依れば、自己の力にて衣食する能はざるは、自己の情弱に基くものなれば、之れに對して慈善を施すは、却つて其情弱を助くるものなりと、いふに在り。斯くて此説は追々實行されて、無数の乞食は甲の都府に逐はれて乙の都府に走り、丙の縣に逐はれて丁の縣に逃れ、水草を逐ふて轉移するにはあらで、警察に逐はれて流動せり。現に中國筋なる甲縣の如きは、一夜無数の乞食を舩に載せて、四國筋なる乙縣の地に送り込みしに、乙縣にては遽かに乞食の降り來れるに驚き、翌夜即ち舩に載せて又甲縣に送込み、斯くの如きこと數回に及ひたることありき。此説の人理に悖れることは、今更ら論するまでもなく、此窮民即ち乞食も、元是れ日本國內に生したるものなれば、縱令之を甲縣より逐ふも、轉して乙縣に入るは當然にして、其本に歸りて之か處置をなさざれば、徒らに之を逐ふとも、果

して何の功かあらん。故に此説を充て、之を行は、國內に在る窮民は、之を蒼海の底に投するの外なきに至らんのみ、貧賤なる劣者は、之を相救はずして之を逐ふか如きは、人類相生養する博愛の義焉くに在るや。此説の非理非道なるは、論するまでもなきことなれば、當時の行政者も悟る所やありけん、其後放逐の沙汰を聞かざりしが、吾輩は今饑寒窟の報告中に無宿放逐の一事あるを見て、轉た往時の放逐令を回想し、覺えず悚然としたり。一國の政府は、固より一々貧民を救濟する能はされども、政府に於ても、社會に於ても、一層貧民救濟に心を用ひなは何とか其方法のなきものかは。

窮民は之を大別して二となすを得ん、其一是則ち自己の情弱又不幸よりして生ずるもの其二是則ち天然の不具又は癩疾に依りて生ずるもの是れなり。前者は尤も多數を占むるものなれば、之を救ふこと尤も困難なれども、社會慈善者の注意に依り、工藝勞役等に之を使用するの道を開き、其子女は育兒院又は貧民學校杯を設けて、之を救濟せば、縱令盡く之を救ひ得ずとも、尙ほ天下多少の不幸者を救ひ得へし。後者に至りては、何れより云ふも、吾人同胞に於て之を生養すると、固より人生の通義なれば、或は獨逸に行はるゝ、原籍町村の義務として之を生養せしむるの法を立つるか、或は佛國に行はるゝ、乞食鑑札を下附して、免許乞食の法を設くるか、其他の方法を以て之を救ふことを得ん。世の志士仁人よ、今日に於て此の救濟を行はされば、將來生存競争の激烈なると器械の發達とは、遂に我が國に於ても、恐るゝき貧民黨を生ずるに至らんなり。

明治廿三年十一月六日

博愛逸史

四

## 貧天地

大我居士

予れ生れて暑中に旅せされは紳士と思はれぬ世の中に際會せり、彼れも紳士なれば予れも紳士なり  
函根、伊香保乃至は磯邊に三日坊主の旅行して、百日の湯治遊山と公言し、天晴れ紳士の大名を博  
せんと底裏怪しき一張を掲げ已に門外まで出てんとせしが嗚呼待つたり、他人の尻馬に騎して走ら  
は俗奴に對して或は紳名を得つへきも職者の爲めに田紳の誹を受けんこと口惜し、予れ亦苟も武士  
の種なり、他人の襲套豈敢て甘せん、と暫し自から躊躇せしも旅行の初一念は勃々として奪ふ可か  
らず、去らば他人と行途を變ふへし、他人は草木露翠なる深山に涼を取るといふ、予は應に巖石突  
兀たる火山に登りて暑を迎ふへし、他人は玉殿高樓に美人の情を探るといふ、予は當に陋巷窮屋に  
貧民の襟を尋ぬへし、火山行、安泊行、何れを我先にせんと思ひ餘りて青天翁に語れば翁は涕淚を  
打かみて云く洛陽の米價玉の如く細民皆飢に泣く、王公大人紳商豪賈之を憂ふる者幾何ぞ、吾々力  
微かにして之を救ふを得ずと雖も、責めては其眞狀を直寫して之を世上に暴白しなば、天下豈に觀  
感して一點の仁心を興起する人なからんや、翁の此行を企つる既に久し、奈何せん衰病相倚り未だ  
之を果すを得ず、子若し二行を擇むなば木賃安泊是れ其時なり、行けや萬年町、飯ヶ橋、乃至は芝

の新網町と是に於てか予即ち意を決し廿三年八月十九日一箇の弊帽、一着の弊衣に一枝の筆、一綴の巻を懐にし其夜の暗きに乗し去て貧天地の中に入れり

青天翁曰く健氣なる哉大我居士、翁居士か出て、貧天地に赴くを見るに品川の瀟瀟に流れ寄りしものかと思ふ討りの帽子を戴き屑屋の親爺に二三百を投じて償ひしかと疑はる、單衣を纏ひ鼠色せし白綿の兵見帯に山十の醬油もて煮しめたるに髣髴たる手拭を挿み没齒のチビ足駄を曳ずりつづ昂然として立去りたり

萬年町露店の  
光景

上野公園の東のほとりスターリオンより四五町北に當り昔より山崎町と云へは何人も知らざることなき貧民の一窟あり今ま之を萬年町といふ、己れ萬年町に著きたるは十九日の夜八時過なり、眼を揚げてト觀れば先づ我眼界に觸れ來りたるは同所露店の光景なり、賣買は何れも下等品のみにて古着、古道具屋には古く垢じみたる浴衣、股引、腹掛、古帽子、火鉢、空瓶の類多し、水菓子屋には山分けの梨子、水瓜の切賣、唐もろこしの炙焼き杯澤山なり、五十集屋には鹽雞、乾鰯、驢の背馬きに限りたるも可笑し、其他ゆで小豆、お傳、こみを鬻ぎ、食パンのつけ焼きに咽を鳴らす者取りわけ多し、殊に同所露店の特性にして類ひ稀なる最小最貧の商人を見たり开は、古下駄四足にて店を張る者なり、其價の最も高きものを問へは五錢なりと答ふ、去れば高く見積るも二十錢の代物に過ぎず、其利果して幾何ぞ聞かまほしき事なり、僧一層貧しき商店あることを讀者に照會せん、これは道具屋其他より出てたる古

古下駄四足に  
て店を張る

一山五厘筆太  
の正札

マツチを集めて筵の上に三徑の山分けを作りたるなり、一山は一握半程の量にて正札を見れば筆太に五厘と書せり、資本なしの代物とするも僅かに一錢五厘の金を得るに過ぎず、されど主人は銀座通に一箇二百五十圓の大倉金庫を商ふ者と別に異りたる人類にもあらず、唯彼は商品の高價なるにて鼻高く、此は類肉落ちて自然鼻高きの苦あるのみ、町の中程にて左に入れれば行燈の燈火至て暗きも、木賃御泊宿萬年屋の文字微かに認むることを得たり。

木賃御泊宿下  
の正札

燈火微かなる「木賃御泊宿萬年屋」を目標とし汗穢けき路次に立入れは只見る三十四五の女極一ツにて食事し居れり宿を頼めは怪嫌の顔にて断はる、去て「下總屋」に宿る、下駄を脱ぎは直ちに三錢の屋根代(宿泊料の事)を拂へと請はる、云ふかま、に之を拂へは何の愛想もなく、乃て寝よと云ふ、蚊帳に這入れは其蚊帳は半面は唐木綿二枚の風呂敷様のものにて綴られたれば燈暗うして見えわかず、涙數行なる處氏の流もやあると這寄れば禿頭一箇の横はるに會へり敷物、蒲團、枕、共に用意なし、禿頭は神田鎌倉河岸の車夫にて其日の稼に勞れ果て一泊したるなりといふ、事不景氣に及へば禿頭君談話の材料山の如し、眠に就かんとする頃宿の亭主來りて禿頭に屋根代を求む、草鞋を脱ぐ前に禿頭に渡したりと云ふ、イヤ内に隙なしとて亭主愈々頬を脹らす、二人顔に争ふて已まず、己れ仲裁の勢を執る、後にて聞けば他の禿頭に獲はれたるなりと一場の紛争儘に收まり漸く眠に就かんとすれば風蚤の攻撃四方より來り終宵爲めに夢を結ぶ能はず。

藤根代の喧嘩  
大我居士の仲

二十日晨起嗽を了り宿を起ち出て、下車坂町、山伏町、南稻荷町、神吉町等を右左に駆け廻り見れば、何れも四疊半の座敷より多きはなく、六人の男女各々裸体に快けに話し居る様など自から又一世界を現はせり、其人は何れも肉落ち骨高く鉛筆畫の阿羅々仙人の像を見るの心地す、石燕子の百鬼夜行の著も意想は全く此に取りたるかと思はれたり、己れ試に山伏町にて或る差配の下を覗き見るに二十餘戸中竈を有したるもの唯二軒あるのみ、烹炊く代物なければ釜の要もなく、釜の要なければ竈の要も亦減すへし、さて此等の可憐なる貧民と雖も各手職のあるものにて、乞食渡世は不具もの、癩疾、老衰幼弱の男女に限るなり、職業の種類如何と問へば按摩納豆賣を始めとし鼻緒職、櫛職、煙草行商、紙屑買、日履、三味線彈、米搗、屑拾ひ、硝子屑買、左官、人力挽、僧侶、井戸堀及井戸綱職、傘直し、賃仕事、髷職、屋根屋、楊枝削、七色節、ヲナスゲ換、皮職、サ、ヲ賣、煙草莖買、古下駄買、紙鳶職、煉瓦職、塗物師、瓦職、玩弄物師、菓子職、摺物師、パン賣、人相見、煙草切、ムキミ賣、マツチ職、空樽買、植木職、竿竹賣、桶職、疊刺、綿打、灰賣、膏物賣、女髮結、竹細工師、宇商、鳶人足、魚商、附木職、飴賣、木片買、粉挽、曲物師、洗濯師、富貴豆賣、虫賣、酸漿賣、大工、下駄の齒入等にて新網敷ヶ橋の貧民窟を始め他の土地に至るも職業の知れざるは此字引にて尋ぬへし、唯何地にても十の七八は男は車夫、紙屑買、紙屑拾にて女には硝子屑買最も多し。

職業の種類

既にして豊住町に出つ、三尺間口に諸手紙認所、脚氣名灸、人相見との看板を掲けたる小住居あり、鼓

人相見の人相

鬘を濡れば七十餘の老婆足袋の底を縫ひ居れり、人相を観る先生はと問へば我なりと答ふ已れ熟く人相見の人相を観るに面貌瘦せ枯れて額の生際はまざインキ瓶の如く、鼻の有無も定かならず、是れ終身浮ふ類のなき人相なり、施しの爲めに觀させてやらんと思ふ心を臍下に秘し、人相の鑒定を頼みたり老婆篋竹を取り出し恭しく神棚に向ひ暫らく默念して乃ち云くお前さんは三四年以來滅切り不廻りの方となれり、去れど秋より來春にかけて開運の兆し現れたり、職を改めぬか專要なり、其上お前さんの性は沙中の金なれば、見出さるゝが六ヶ敷だけ見出されなば江良物えらものとならん連合つれあひの有無は慥かならざるも三人までは不縁の御相なり、殊に老後に至るも長男に養はるゝことなく、次男以下に拾はるゝの色現はれぬ、其積りして稼かれよ杯利口そりに述べ、可笑おかしさ堪え難けれど、此處ぞどこらへ謝禮を投して起ち出てたり。

翁云く翁大我居士の人となりを観るに燕頰虎頭鬚目鰐口身長六尺に過ぎ音吐鐘の如し、性沈毅にして物に動せず、寡言にして世に阿らず、鑿鑿評して沙中の金といふ實に居士の人となり適中なり此評己に適中すれば其長男の手に養はれず次男以下に拾はれんといふ者亦焉んを居士の好未來記に非ざるを知らんや、意ふに居士か卓落不羈の志ある或は婦人の手に死せず、居士か死後族人の其屍を拾ふの事あらんも知れず、居士異日誌を得て再び鑿鑿を豊住町に訪ひ大に其の明鑑を稱し重く賜ふの時あらんことを望むなり。

松葉町、清島町、北田原町、花川戸、橋場

馬道の木賃宿に泊る

下谷より轉して淺草に入り松葉町、清島町、北田原町地方、今戸、橋場、花川戸の貧民を觀る、何れも暮ら  
し向は知れざるも亦た是れ一箇の貧民窟なり、橋場邊にて黒の粗末なる女洋服を着たる若き女か幾人  
となく其の洋装のまゝにて頬賑らし顔赤らめ火吹竹もて窺の火を吹くあり、抱への車夫を慕ふ令嬢の  
なれの果てか、去りどては餘りに數多し、其の芋屋の店先にてふかし芋杯むしやふり喰ふ様より思へ  
は好て洋服を着たる子子女學生か、それにしては理窟なき顔色に乏し、何者ならんと路人に問へば鐘  
淵紡績會社の職工なりと、左もありなん、此日淺草馬道の木賃宿「中西屋」といふに宿る、此あたり釜  
屋、越後屋など同業多し、何れも掛行燈の側らに「別間あり」と特筆したり、宿泊の客種すじ自ら現は  
る、蓋し別間は屋根代五錢にて、並みは三錢五厘なり、余は差詰め三錢五厘の方を擇ひたり、好き機  
會なれば「屋根代」と「木賃宿」の歴史的關係を云はん、コハ安泊行者の討究すべき重要な一個の問題  
なり、昔は木賃宿なるか故に、烹燒をすするに別に薪炭の料とてはとせざりしが、今は木賃宿は其  
實消えて屋根代とて拂ふこと、なれり、去れば烹燒する爲めには別に相應の木賃をも合せ拂はざるべ  
からず、而して今の木賃宿又二つの種類あり、一は箸、曲物、片口、土鍋などの道具を有し自己の住家  
の如く永く滞留するものにて、中には十二年間の滞留者ありといは、讀者は驚かるなるべし、他は一  
具を有たず、外にて飲食し唯雨露を防ぐにあらざるもの是なり、淺草は即ち後者多く、萬年町新網町は前者  
多し、今夕は一張の蚊帳に入九人押し込まれて同宿す、其苦しさかさ／＼伏木丸密行者に劣らしと思は

屋根代と木賃宿の歴史的關係

貧民と宿

れたり、去りどて義捐金を望む下心ありていふにあらす、此蚊帳は二ツのものを素人の手にて一角と  
りて作りたるものなれば、大さは室内滔天の形あれども、其襪脚一方は長く、他方は短く、恰も象の兩  
脚に鶴と鴨の足をつけたるか如し、一方長しとて高く吊上ぐる譯にも行かず、異種合同の政黨など思  
ひ合されて一入なり、明方より雨降り續き、正午に至るも息まず、已れ傘の用意なければ詮方なく翌  
日も茲に滞宿す、合客の賣卜者、車夫、目鏡師、馭者など皆一日の業を休む、客は何れも雨を敵とする  
も戦ふの勇氣なし一客あり煙草をきらしたりとて千々に心を碎く、蓋し煙草は近邊の店に無きに非ざる  
も尙ほ其源をきらしたれば終に買へず起き直りて「寝ては考へ起きては思索」と壁に面して私言も可笑  
し、已れ此に宿して始めて覺れり雨の日に錢なく食なくて木賃宿に籠城するは谷將軍の熊本籠城の困  
難に劣らざるべしと、やがて晴間を見て酒飯屋の金ボールをくぐる、仰き觀れば控書あり法一章に約  
せり、云く「御酒半かはりの御注文御断り申上候」と此は五勺つゝ二度に頼むもの多く、爲に量り増の損  
あるによるとか、客の工夫、亭主の防禦、用意周到といふべし、明くれば天漸やく晴る、やがて起つ。

白首の怪物

二十二日此日は新網に行く積りなりしが兼て本所津輕原には毎夜白首の怪物出て、行人を惱ますよし  
語るものあり、函根より此方には怪物のなき控われは何條去る事あるべきやと思へど、天地の大ど  
東京の廣さを以て、控以外は怪物なしともいへず、旅の次手に探検し來るも亦た一得ならんと驅け出  
したり、路すから再思すらく白晝の中天には紅日の輝くあり地には警官のまごつくあり、それでも出



てくる半までの纏魅なけん、何處にか暫らく時を過じし、夜に入りて赴かんと且つ考へ且つ歩する間忽ち一天掻きりて墨を流すか如く、一陣の風驟雨を送り來る、已むなく路傍なる神明の社に避け三時間ほど待ちたるも霽るゝ氣色更になし、儼て再び驅け出したるに、トある町角にて一杯賣の洋酒屋を見出せり、是屈竟と入てブランド二杯を呑む、何を知ん此家已に怪窟ならんとは。

嬌なく怪窟に宿す

濁來一杯の酒を呼はんと欲し漫然街端の一洋酒屋に入りブランドの Coppas を手にしつゝ、側を看れば同しく是れ一軒の家にして今這入りたる入口の他に又一の入口ありて木賃宿の看板を掲げたり是れ屈竟と心裏早く商量しやをら店の老婆に向ひ近頃ボンヤリ田舎より來り昨日は淺草馬道に泊りたるか段々懐ろも淋しくなりぬ、先千葉なる友達の許に赴かんとて此處まで來りたるに此俄か雨に出合ひたり一夜の宿を假し呉れよと誠しやかに話し掛けたるに婆容易に返辭せず、屹と亭主の面を見詰たり其狀前に對坐したる肥大の親爺か差圖を待つものゝ如し、幸なる哉亭主は諾せり、余か喜ひ知るべきなり余此處ぞと催促なきに先つ屋根代を渡せり、後にて破談せられざる爲め先制の策を施したり、是れ已れ獨得の秘傳なり、日本授産館より教へられたるなどにはあらず、時に雨風彌々烈し折柄十八計りなる怪しき女の白地浴衣に赤き細紐をしめたるか風強ければ傘取られじと細めに開き此方を指して來るあり、宿の婆忙はしく之を外に迎へて何か密々話したり、只見る婆の此女より袂移しに一頓を受取りたるを、已にして婆は座敷に立ち返り宿帳を出して姓名職業など記せといふ、心得たりと例に據り

無職業の士族は禁物なり

て姓名をつけ上に「無職業」と認めたるに夫妻其口を揃え何とか別に職業を附けよと迫る、已れ職を得たさに遙々東京に來りたるものなれば無職業に相違なしと斷はる、亭主頭を振りて聞かず、業果ては困りたる風にて下駄屋なら下駄屋と書けなど意味を覺れといはぬ計りに話す、左なくはか調への時不都合なりとて「無職業」の原案に反對す、去らばとて再ひ筆を執りて學問修業生と付けたるにて満足せり、後にて亭主の言によれば一昨年千人計りの書生さんか上野榎鉢山に集りて一揆を起す相談を爲したる騒動のありたる時警察署より迷惑を厭はゞ無職業の士族は一晩でも泊めてはならぬと下知せられたることあれはなり、去れと今日は最早此事なければ心易く思し召せなど感めたり、乃て枕を借りて横臥したるか其の田舎者と思ひ込みたれば夫妻は已れに氣を置かず、種々心得難きことのみ打ち談る耳を澄して聞くに婆は膝を摩り寄せて亭主に向かひ夕へのは「虎の頭に鼠のシッポ」近頃は九て不じるしなり今夜こそ旨くやりたし杯語る、貴女道などに交らざる已れには解する能はず、暫くして婆は何番にかせんと私語として青き野紙を袖に匿くして文字を書く、舉動言語彌々不審談なり、既にして亭主は身を起し是より遊ひに行くとして絆纏一ツにて黒き革囊を手にし雨を衝きて出たりたり、遊ひの語は専門語なり猶ほ遊ひ、人の遊ひの如きか、去後凡を五分計り今日は誰も集らずとて歸りたり、婆は立て夜中にも若し寄合はゞ着物を濡し置いては困るといふ、其の絆纏を柱に掛けたり、已れ此時判斷を下せり、是れ博徒なり、一笑せり、此時に於て已れは瞬間も忽にせざる熟練の探偵者にてありき

虎の頭に鼠のシッポ

やかて日暮る十六七の娘又來りて夫妻に挨拶す、至て粗略なり、櫛箱を取り出し鏡に向て化粧し衣裳を着換へて去る、引違て同し年ころの娘又々入來りたり、髪の特様、帯のしめ方杯なまめきて只人にはあらず、去て對面の揚弓店に這入りたり、爾後出入常なく點燈の頃に及へば先の娘は側の洋酒店にあるかと思へば忽ち已れの後方より現はれたり、さては洋酒店の坐敷より此方に通ふ間道あるかといま見れども分からず、益々不思議、彌々面妖なり、既にして婆は已れに寢よといふ、床は已れの横臥し居る處續きにて十二疊敷なり、此に入れば後も奥も板張りにて前は隣家の壁高く入口一方開きたるのみ、蚊帳に入れば共に枕を雙ふるもの唯二人の車夫あるのみ、間取の構造腑に落ちず小便に托て奥の板張の細道より入れば薄暗き燈火ありて三疊敷に一切の夜具備付あり、便所より回りに已れの寝ねたる板張の後を見れば此には別にさゝやかなる四つの室ありて各々床を敷のへたり、宿泊人のなきに夥多の床を取るは何の要を、尙此座敷には何人も店の人に知れぬ懐心の儘に出入るを得るの作方なり、斯かる怪類なれど十二疊なる一室の客のみは皆第四百五病患者と豫め相場極まり居れば諸人の妖崇らんとせず、可笑くも亦幸なり。

二十三日起出つれば隣家の時辰八時を報す寝過くしたりとブリキの盥を引寄せ急ぎ洗漱してか早うとやれば婆は既に已れを以て醇然たる田舎漢と認め最早打解けて氣を置くところ無し、婆乃て蒔袴板に摺りたる骨牌大の一紙を執り來り已れに示して何とあるそと質す、吁是れ楞滑的文字なりと思へど平

平虚々として手に取擧げ之を見る、白面、紅鬚、赤○黑鼻、晝夜現などの字あり、已れ初め之を讀むに天地玄黄宇宙洪荒の句調を用ゆるをもて婆解する能はず、因て一二其字義を講釋し聽かすれば直ちに合點したりとて出たりたり、後ちに之を或人に質せば則ち已か推測に違はず、是れ彼の支那人か齎したる博奕の一種「七八」と稱ふるものなりと、聞く七八初めは横濱に於てのみ行はれ居たるも今は府下に傳染し其本據は多く築地居留の支那人なりと、前の謎語的文字を記したる紙は朝と夕に本據より各所に配付することにして此配付人をば「運送」といふ、目下府下に三十餘軒の運送ありて各々組合に配付するの仕組となれり、かゝれば其配付を受けたる組合は七八の三十餘法に照して其意向を記して金を賭る運送乃ち之を集めて本據に送れば支那人は之を調査し當者へは賭一錢に三十錢の割合にて金を贈る、運送は其中より二錢宛を受くるの約束なりと、此輩の中に一種の諺あり「七八三年考ふれば肺病となる」と蓋し其成敗に焦心苦慮するか爲めならん、尙ほ此輩の言を聞くに例へば曾て「响」といふ一字の題出てたることあり「山彦」と答し「蚯蚓」と對したる者皆な落ちて「田螺」と答へたる者常撰したりと、此に一談柄あり横濱に某三百代言あり、七八を好む食色より甚たし或時「山に在て水に遊ぶ」といふ一題出つ、三百乃ち家財道具を典盡して十五圓を得たり、即ち之を賭し「月」と答を付けたるに其の管中り四百五十圓の巨額を得したりと、此輩流か恒産を擲ち常業を棄て、之に熱衷し身を亡し家を失ふ者は全く是等の談に神魂を奪はるゝか爲めなり、今や七八の勢は虎列刺と其兆を同うせり、今

に及て之を防かされは其社會を荼毒する勢少なからんとす、當局者嚴重に探偵を盡せ。

此日九時宿を起ちて深川須崎辨天に參詣す、此所より海岸通りの貧民を觀察して新網に至らんと意なり、辨天社の堤に上れば昨夜の暴風雨にて怒濤山の如く來て岸を打つ其物音驚ましき云はん方なし、忽ち難船……難船と呼ひて人多く馳せ行く、己れ亦後を追ひて至り見れば、二間大の老ひ朽ちたる舩あり、岸に繫かんとすれば石に觸るゝの恐れあり、繫かさんとするに錨の用意なし、船には六十歳餘の舟子立ち働くも逆巻く波には老の身の敵すへくもあらず、是を觀て勇み肌なる二三の兄弟助けんぞアセるも此方は陸にて彼方は波上固より意の如くならず、岸頭に三歳と六歳位の可憐なる男の兒立てり、見物の小供等は舩の動搖を見て面白氣に立ち喚くも二人の小兒は心ある人の恵みたるならぬ、菓子杯持ちたるのみにて舩上の父のみ視詰り居れり、親を思ふ小兒心の愛らしき、此舩は永代河岸より何れにか通ふ船なりしが、昨日の旋風能を折られ、漕き後れて今朝しも此方に吹きつけられたるなりと、世には夕べの嵐に朝顔の蕾一つとられたりどて罪なき下女を罵る隠居もあしん之れを觀て轉た感想に堪えず。

大我居士查公  
の誓めを受く

洲崎の方より歩を轉し芝の方へと志し木場の邊まで來る時後ろよりしてオイ〜と己れを呵止する者あり何者にやと願は嚴乎たる白衣の查君なり、用なき人の所爲かなと思ひつゝ足を停むれば查君は近よりて御身は何れより何れに行かるゝ人なるかと問ふ、洲崎の辨天に詣て、返る路なりと答ふ、今

より何處を指さるゝか、芝の新網に赴くなり、御殿は何處、奥州仙臺、など問答一遍、御用乃ち了る證なき事に乃公か安泊行程を遮られしを一たひは慍くみ一たひは惡みたれど、願て我扮装を視れば金光即紳の當世には怪まるゝも無理ならずと一笑して此を去れり。

芝口の洋酒店  
に飲む

既にして芝に出つ、此間コレヲ死亡人の送屍二つに會ふ、安泊行程殊に此般のものに邂逅す、奇も奇なれど不氣味も不氣味なり、真し三杯を傾けて些の豪氣を買はんと欲し芝口なる洋酒店に敢て借して矢大臣を極め込みたり、櫻櫂酒、紫蘇酒、櫻酒、ベルムーツ、都合六杯を傾くれば亭主頗る不安の色あり酒代を氣遣ふならんと一圓札を投ずれば顔色忽ち改まり進て林檎酒、梅酒、雞卵酒など交るゝ出しと俯むるも可笑し、頃刻にしてアルコール心肝を貫ぬき酒氣骨髓に徹し忽ち身の豪傑たるを覺ふ、乃ち此店を去り濶歩して新網の貧天地に入る、天地は金杉橋畔より左する一町程にして濱松町の後ろに

濱松町

開く、木賃宿あり澤部と稱す、之を叩けば屋根代二錢なりといふ、廉なりといへば主の女房打笑ひ御前さんの男振か善いからサ杯馳る、此家は十六疊の一長室にて奥に高格子あるのみ左右は壁なり表の一間を入口と流口の二ツに用ゆ、故に實際は十四疊敷なり、構造の簡單なる亦自ら貧天地の物なり。

貧天地の法律

何れの木賃宿も一客一疊即ち是れ貧天地の法律なり、去れば此宿の如き十四枚の疊あれば十四人を容るゝを得る道理なり、入口の第一疊より順次客の種類を觀るに

客の種類

最初の一疊は大我居士の城郭にして常に主の女が裁縫などする所なりといふ扱は上質の禮をもて優

持せらるゝものと見ゆ。

十四

次の一疊には三十六七の飴屋あり、千葉周作氏の門人の又門人にて上野戦争には官軍方なりしなど誇る貫目はヤット十一貫五百目位なるべし。

次の一疊は病者なり教會の救助にて穢かに其日の壽命を繋ぐ三十七八の男と四ツ斗の小見なり。

次は七十前後の婆にて二ツ計の孫様のもの抱へたり是れ純粹の乞食なり。

次には老實に立ち働く者あり、ヲラヌゲ換入にて二十五六なる小兵の男なり。

次は六十計の紙屑拾ひにて手足甚だ自由ならず。

次は乞食体なる五十位の婆にて辯舌流暢頗る才氣あり、自ら云ふ婆は昔し長州屋敷に奉公したりし御殿女中のナレの果と、其力其氣十四疊を壓し隠然此室の覇根を有す。

次は籠輿を肩にして卅五六年の間東海道五十三次を跨にせしと云八十以上つ温和なる老婦なり。

次は清せ衰へて見るかげもなき四十前後の夫妻なり察する所乞食なるべし。

次は二ツ計の小兒を養ふ三十前後の女なり、母子共に毎夜路頭に出て、行人の恵みを待つ者なり。

賓客斯くも堂に滿つ、已れか爲めには是れ雇賃の遊仙窟なりと、ヤをら分賦の一疊に此身を卸し、衆に對して簡單に會釋したり。

十四疊内十餘の客盡く一疊を以て領地として各々天の一方に坐を占めたり、各領の三間は隣邦の一疊

と相接し只一面のみ壁に據れり、虎嶋を負ふの勢あり、其壁は手の届く處に小さき柳ありて上に載せたる器物を觀れば土瓶、片口、箆、茶椀、箱、土鍋の種類なり、棚の下には播鉢に灰入れたる火鉢を安置し

一器を以て七器に代用す

飯を炊き、菜を煮、湯を沸かし、茶を煎し、烟草を燻らし、暖を取るの諸用に供す、若し夫れ王公貴人の家なれば火鉢、烟草盆、七輪、爐、竈、炬燵、暖爐等少くとも六七器を要するところなり、一器を以て七器を代用す、貧天地の簡古想見するに餘あらん、既にして主の女杉丸太の片塊を持ち來りて已に

飯よく

渡す、何の用器ぞと取上ぐれば安んぞ知らん日中の疲れを醫する安眠器ならんとは、ア、是れも脇より腹か進歩せり、文明時代の物なりと引寄せて一睡買はんと欲し一疊の上に横たはれば大男の悲しき首足餘りて置くに處なし、即ち辭を卑うし禮を厚うして隣接せる憐れの爺に其領内を借受け始めて一「大」字を作るを得たり、横臥仰いで此家の構造を觀れば我足一たひ壁柱に觸れなは山岳爲めに震はんずるの状あり、前刻洋酒屋の三杯此時睡神を誘ひ來り漸く華背の郷に誘はんとす、トロくとする内已より第三疊に臥し居たる例の孫を連れたる乞食婆屢々頓狂なる聲を發して睡神を驚かさされて其方を觀れば婆は其孫を抱きてウトウトの間在り、孫なる小兒か目を覺まし「飯よ」くと啼くを五月蠅とて呵るなり、呵られなから益々ぬたり、後は泣きつゝ「飯よ」と叫ぶ、婆も今は呵り切れず、其兒の頭を二つ三つ打ちたる後ち其手を延ばして棚上より一の風呂包を卸したり、不思議や同時に小兒の啼聲忽ち息みぬ、如何にするやとながし目に觀るに婆は袋々包の口を開き何やらん取出すなり、此

十五

時一陣の悪臭先つ来りて己か鼻を撲つ既にして取り出したるは何れの家よりか袖乞し来りし物なりと覺し、飯あり其上には鹽漬の辣薑を載す、婆先つ菜を小判形の曲物に納め、飯をば手掴みにて傍の箆へらに移しつゝ三度の一度は之を口に運ふ、小兒も婆の側に踞し同しく天然の箸にて飯を掴み舌打鳴らしおむへき小兒て喜び喰ふ、其食を箆に移す様、食する様を察すれば同し食中少しあざれたる處をば後ちの食とし、六くあざれたる處を先つ食するなり、斯かる半腐の食物も小兒には無上の歡樂を與へ、忽ち満足して其儘スヤ／＼と寐入りたり、乞食界の華胥園に遊び負郭墻間の馳走に飽く様の夢を見るならんと思へは鬼を欺むく大我居士も覺えず、暗涙に噫ひたり、朱門金屋の家の子、乳に飽きては菓子を求め、慈母に抱かれれば乳母に負はれ、榮耀の天地に鞠育せられ、慈愛の乾坤に生長す、然るに貧の天地に來れば慈は酷薄の一婆外に求む可からず、食は偶然の棄捨物よりなし同しく是れも人類なり、一の罪なき嬰兒なり、先天に何の科まがかある、是に對しなは如何なる人も一掬の仁心を動かさざらん、アハレ社會上層の人は下層の同胞少くも無告の兒子を救出して人たらしむる方法を思へ、否らされは今こそ無罪の嬰兒なれば此等の無罪なる嬰兒か都て未來の罪惡の種子たるへし。

貧天地間の事情を探るには貧天地間の外形を目撃せしのみにては盡すへからず、身其生息物に就き親しく談話其談話は臆面なきの談話に接し始めて之か一斑を概するとを得へきなりと思ふものから十四疊内の諸寶を見渡し退きに行くには適きよりすの格言に據り己か城郭と頼める一疊に隣接し前刻其の

八十歳の乞食

所領の一年を貸與し呉れたる憐れに愛しき八十餘の乞食翁をば先つ話敵に捕へたり、乞食翁は己か言語の仙臺音なるより端なく三十餘年の昔し一挺の肩輿を昇きつゝ、五十三驛の上り下りに伴侶の好み深かりし仙臺男の勇八とやらんを想ひ起し一種の感慨を動かして昔蹟を始じめたり、己か耳には似非博士の鼻曲みたる天狗談聴くより鋭かに面白く響くまゝ乃て之れを書付けて、一種の想起録をそ作りける其の話に

今昔便利相及はす

人々は皆宜はく今日は實に便利至極の世界となりぬ悲の天竺の西洋のど在らゆる國々の品物まで此處に居ながら買ふこと出来、歩くには車、棲むには煉瓦、萬事萬端便利至極の世界となりぬと、成程便利に候ふへし、去りながら开は只た黄金多く持てる御方々の便利なれば簞箱風勢は申すも愚かなり中より以下の人々には何の便利が候ふへき、昔しは松島町あたりで七八百より二米までなりし屋賃の家の今は五十錢出して借れず昔しは山八とて八十投せは是れ此煙草入に二抓と半程ありし其煙草が今は一錢拂ひても二厘は天から印紙に差引かれ残りし八厘の其書はヤット之れに半分も候はず萬事萬端皆之に連れ候ひぬ、何の便利至極や候ふへき。

併し強て今日の世に上下通せし便利を探し候は、昔し芳原の遊びには御大名でも御旗本でも御士でも何方でも肩輿の儘にて大門内に打たせ玉ふことならざりしに今は乘れば簞箱でもドコの何處にも

就老翁の今昔

横着け出来る是等が先の方々の宜ふ所の今の便利にや候ふらん。  
など頗る當世に面白からぬ一段の不平話に主客何れも興來りて翁は覺えず談を進め一世の風紀論に入  
りたるには已れも覺えず一驚したり

今古氣節相如かす

貧老翁又た今古の氣節を觀

今の車屋は先づ雑と昔の肩輿屋と申しからんと若き人々は思すらんが其の實は覺かの違ひある様覺  
え候ふ、今の車屋には瘠せさらばひて爺の様なも見え小さく矮く小供の様なも多く候へど其上  
の肩輿屋は皆雲突く計りの男の上に體だには都て刺繡し、其勇ましき云はん方候はず、別けて其頃  
山十、橘、赤岩などいふ名ある家では客を送りし返り肩輿には如何なる丸持の旦那にても一切乗せ  
ぬが掟にて候ひき、去るに今は返りにもあらぬに返り車でお安く參らんなどいふ迄になり果て候ひ  
ぬ、之を思へば今の車屋は體も氣違も覺か肩輿屋には劣りたる様に候ふ  
といひつゝ、更に咳ふきして

御前さん御馳きなされ其肩輿屋の一人が今は早や此車屋さへ出來ぬ身とはなり果て候ひぬ

と喟然として長嘆するを見て痛く腑懸を催ふしたれば金を與へんか物を取らせんかと一たびは思ひし  
が此身已に此の天地の人となりながら旦那の振舞然る可らずと考へ換え、親爺一處に飯食はん去來共  
に行けと誘へり、翁は躊躇して再三辭退せしが已か強ゆるに因りて始めて應し帯をも締めず、蹠履出て

大居士長者  
翁と號す

たり、誰か知らん貧の天地乞食の世界にも斯かる禮讓の君子あり、翁が得意の酒家やあると聞へば昔  
より得意の喧嘩屋ありと答ふ、案内させて行き見れば金杉橋畔の一矮屋なり、例の金モールを排して  
進み何かあると聞へば鹿角菜、割肉、里辛、茄子、蒟蒻、半片等と擧稱す、鍋はど再びすれば鱈鍋の候ふと  
いふ、居士可なりと一喝し鍋二枚と酒一本及び飯を命し推して翁に喫はしむれば翁歡喜して止まず、既  
にして伴ひて此を出つ、翁途すから謝を述へて口に絶たす、其言真に肺腑より出つ、彼れや無告窮苦  
の民終歲違々一瓶の酒一椀の飯に飽かす、自から招くといふと雖も豈憐む可からずや。

乞食翁と共に酒家より歸り來れば衆頗る翁を羨むの色あり、彼の室中の櫃文例の婆伯は翁に詰るに御  
馳走の如何を以てす、亦是れ貧天地の事なり、既にして天漸く暮るれば衆丐先を争ひて櫻川なる出世  
辨天の縁日に赴く、其身出世を希ふにはあらず出世を希ひて詣つる人の袖に絶らんと欲してなり、等  
しく縁日に赴くなり、而るに彼れは出世の爲めに詣で、是れは在世の爲めに行く、是非なきものは貧  
富なり。

出る者既に出て、入る者亦既に入る、室中少しく静まる、乃ち木枕を引寄せて寝ねんとすれば隣邦よ  
り又更に話掛くる男あり、顧れば例の小兵なる給賣なり、千葉周作の門人の又門人なりと威張る給賣  
なり、例に據り種々の手話話を以て起りしか遂に安治行の本题に入れり、給賣已に向ひ先生、見れば  
お前さんも餘程落魄たまへる様子なり、ソナナ結構な體にては東京三界に涙々はんより徵兵に出で玉

千葉周作の門  
人の門人

鮎賣の鮎屋の  
本元

ひし方遙かに勝りたらんものをと相憐の意を表す、己直ちに之に應じ、徴兵は固より望む所なりしも戸主の悲しさお上にて取立てられず、己むなく東京には出てたるなりといへば、鮎賣は忠實だち、先生ドーダ事は相談によるものなり戴盃の鮎屋其本元は淺草に在り、本は警部まで勤めし人の女の爲めに過ちて今の商賣となりて居らるゝが日に三兩ほどの商ひあり、我友達にも二三人其世話蒙るか居り候ふ此身なんどは斯かる醜男なれば抛却られて候へど、先生は體が好ければ採用せらるゝこと大丈夫なり、先生ドーダやる氣あらば骨折て見候はんかといふ。例より肩輿屋の翁異議を挿入しお前さんの様子を見れば耶蘇の本賣など相當はしからん、鮎屋には些惜しき物なりといへば、鮎賣は之れを駭し耶蘇などに這入らんより鮎屋こそ我が勝りたれと論ず、己即ち之に謝し世話する人のありて明日鯉ヶ橋まで行く筈なり、去れど是れとて當にはならず、話若し纏らずば宜しく願ふと挨拶すれば鮎賣快く承諾せり、既に博愛の義を解し、又然諾を立つるの風あり、誰か貧天地中に仁義なしといふや。

鮎賣の政談來  
島恒喜に及ぶ

鮎賣更に政談に移る、乃ち謂て云く昨年爆烈弾を外務省外にて投したる來島恒喜は我鮎を屢々買ひたる因みより善く其人となりを知り候ひぬ、又其話をも承り候ひぬ、抑々今日の政治は……遠慮會釋もなく現政を非難し毫も顧慮する所あらず、面白ければ尙ほ會話を續けんせしが、餘りに其言の過激に涉れば嫌疑を避けて已れ只た、ハハ、成程、左様、杯にて應へるのみなれば彼れも終に其政治上の意見を披盡せすして止みしは遺憾なりき、併し其政論中頗る見るべきもの抄からず。

鮎屋の名論

我々は禁廷の安穩なるか爲めに生息し得るものなり父母は我々の上にて、禁廷は又た父母の上なり禁廷は善も爲さず、去りて又惡をも爲さず、恐れある事ながら申さば赤子も同様なり、今日政事の向の色々に變るは全く御側近き政事役人の所爲なり云々

と「皇帝は惡を爲さず」又「皇帝は政治の實に任せず」といふ立憲制度の格言も多く此鮎賣か政論に出てさるど面白き、斯かる快活なる一男兒も此社會の中にては彼れか六ヶ敷漢語を用ゆると、言語に少し圭角あると、小理窟をいふ僻あるとをもて口喧ましめて誰ありて賞むる者なく、尙ほ此男の不評判ある一原因は飯を炊くには一升以上に限るなど此社會に不相當なる放大的言語を爲すに在りど、左もありなん、是れ獨り此社會のみならず、議論あり腕力ありて意氣天下を蔽ふ壯士の連中か兎角世に容れられざるも亦全く此に在らん。

肩輿屋の乞食翁も疲れて睡り、鮎賣の壯士も話に倦みぬ、去來已も一夢を買はんと木枕を引寄せつゝ、夜の物無ければ浴衣のまゝに横たはる、折から中空に輝り渡る月破窓を漏れて枕邊に照らし、増上寺より撞き出す鐘無常を送りて孤眠を驚かす、

落ぶれて袖に涙のかゝる時人の心の奥ぞ知らるゝ。

警察の御用

杯の歌今更の様に其妙味を覺えしむ、既にして夜は二時頃となりぬ、忽ち銅喙の聲表に起る、枕を敏て之を聴けば警察の御用くと叫ぶなり、其入來るを見れば一個の白衣公なり、宿泊人の如何を一問

して去る、是等の家時々匪徒の來り投するあり、故に其宿調をなすに多くは深夜を以てすといふ、警察上已むを得ざるの事なり、只た此に臨む白衣公の緩急なる泥靴のまゝ、往々坐敷に上り我々の仲間か起臥し飲食し棲息する神聖的城廓の地を蹂躪し去る事尠からず、去れと下層人の悲さは其威嚴に恐れて口之を尤めも得ず、空しく憾みを呑むのみなりと後にての不平話なり、住居を侵さざるの憲法は、新網、蚊、ケ、橋、とて遺さざる可きに蹂躪するとは、憤ろし。

再三眠を攪破せられて夢神は已に己を勝はず、轉頭反側する中に種々の敵上下四方より襲ひ來る、翔翔して來るものは蚊なり、踴躍して來るものは蚤なり、匍匐して來るものは虱なり、何れも其無<sup>レ</sup>飽の欲を逞うす、

前日萬年町の宿陣に已に一經験あるも斯くの如く太甚しきに至らず、今夜此に宿して稍々此地の眞

境に近づけり、已之を筆するも人は中々此境の十一をも想像し得じ、殊に弱りしは南京蟲なり、初め諸蟲に襲はるゝ中時々異様な一種激しき痛みを感じるあり、已に蝨<sup>せ</sup>れたる後熱を發し痒痛いふ可からず、已其虱蚤に非ざる可きを疑ひ隣臥の鉛賣に質せば果して是れ南京蟲なりといふ、其蟲は如何の形せるやと問へば、鉛賣も亦之を目撃せしこと無し、只た關中摸索し捕へ蟲を潰したる後其爪を嗅くに蚤虱には別に異臭なきも南京蟲に至りては其臭きこといふ可からず、是をもて之を知るといふ、此夜此蟲の爲めに蝨<sup>せ</sup>られたるは右脛に一ヶ處、兩臂に各二ヶ處にて後ち數日に至るも其痕癒えず

已は是を以て戰陣に名譽の創を蒙りたる思をなせと、毎夜此賊に襲はるゝ人々の苦しみ如何をや。

翁云く是れ則ち肥なり、此蟲は形ち蚤より稍々大きく其色褐赤を帯ひ、蚤の如く踴躍するものに非ずと雖も馳行疾速にして捕ふ可からず、晝間は柱壁臥榻等龜裂の罅隙に潜匿し、夜間に至り人の寢靜まるを伺ひ出てゝ人を蝨す、一たひ之に蝨さるれば、日を累ねて癒えず、其之に中毒する者は一種の瘡となりて膿を發し數十日を経されは治せず、此蟲家に生ずれば其家を火かされは消滅せずといふ支那地方に甚だ多し、一たひ彼地に遊ひし人は皆知る所なり、故に邦人之を南京蟲といふ、其地方に取るなり、支那人は一般に之を臭蟲といふ、其異臭に取るなり、今大我兵士の蝨されたる所と鉛賣の語る所とを見れば果して是れ肥なり、翁曾て謂へらく我貧天地の人冬は寒、夏は熱、蚊、蚤、虱に苦しむと雖も幸にして肥の害を免かる是れ尙ほ支那人下層の徒に勝ると、今にして始めて其の知らざるを知り、悚然たるもの焉れを久し。

此新世界を初めて見舞ひて物の特に珍らしきに種々の談話、種々の事故種々の寇敵に會したれば徹骨殆ど眠を成さず、兎かうする中夜はほのくとなりけり。

明ければ八月廿四日木賃宿を辭して出て、蚊ケ橋にと志す、芝公園の清水に嗽そき、更に數町歩を西北に進めしか睡神は此時に尋ね當りしか、頸りに睡眼を催して堪え難ければ赤門の側ら葦松の蔭に芝生を席とし正午の頃まで休らひ、今にして知る貧天地間の人物か原頭橋下に左も快よげに眠れるの

## 蚊ケ橋



故を既にして勇氣我に復る、やをら身を起し殿ヶ橋なる一窟に入れり、殿ヶ橋は内日刺す赤坂の宮の  
 後ろに在り、畏こかれども其宮は久しく、至尊の光宅により天下億兆の崇敬を増し、陋しかれども其  
 橋は長く至賤の潜伏により都下百萬の愛憐を惹く、先づ其家居の櫺を看るに其長屋は何れも十有餘軒  
 つゝ連接して一長屋をなしたるものなれば恰もワゴンを聯ねし瀟車の如し、此地は山の手なればにや  
 下町に比ふれば大抵は路次廣し、去れば屑屋の徒は拾ひ集めたる汚穢の襤褸紙屑杯を銘々其住居前の  
 路次に散布して天日に曝したり其臭氣紛として鼻を撲ち嗅神經を刺撃して不快さいふ可からず、此處  
 なめりと忍びて路次に入れば其光景は亦略は新網町萬年町に髣髴たり、日中の頃どて何れも外に出  
 て家に残れる者甚だ尠なし、其残れる者にては草鞋、マツチ箱、團扇の骨子杯造る處三四軒を見受け  
 たり、人は是等の地をは一に惰民の巢窟なりといひ罵りて顧る者少なければ、今此一窟の裏に於て  
 壯者は出て、業を勉め弱者も家に在りて空しく眠食し去らぬを見れば人言の過言なるを知るに足らん  
 尙ほ前方に進み行けば小兒の死骸壘の内に横はれり、心悸のきて近より見れば汚穢けき襤褸二三枚を  
 もて蔽ひ水は骸上まで及ひたり、如何せしや例の疫死には非すやと恐々ながら停止して諦視すれば曷  
 を圖らん死骸にはあらで快げに熟睡せるなり、悸きは轉して驚きとなりぬ、斯かる物の内に如何にし  
 て可憐の愛兒を投し置くや、斯かる物の内に如何にしてスヤ／＼睡らるゝやと思へば、更に驚きは轉  
 して怪しみとなりぬ哀むへし貧の天地。

臭氣紛々

小兒の死骸壘  
 の内に横はれる

石油窟中有兒

是れより尙ほ此一窟に暫しの日子を費さんと欲せしが數日來の疲れにや心地少しく例ならされは思を  
 殘して後日を期し絞ヶ橋を立出たり、青山練兵場に差かゝれば兵營の大工事最中にて七八歳より十一  
 二歳の小兒其炎天の下に氣息喘々煉瓦石をは運ひ居たり、何れも日に焦けて黒奴の兒といふとも辨し  
 得じ尙ほ其わたりを見渡せば一箇の大八車に三四本の大木を積み、其上に三ツ計りの兒を石油の函に  
 入れ、繩もて堅く結び付けて父なるが前を挽き母なるが後を推し、漣なす汗を拭ひも敢えず押行けり  
 嗚呼彼等として此勞を取らしむるは生をして然らしむるか、食をして然らしむるか、覺えず  
 毛髮悚然たり。

此行都合六日間一先づ僑居に返らんと欲し九段坂まで來りしか行前に比すれば身體の稍々疲勞せしを  
 尋ゆるまゝ銅表側の量體器に上り體量幾何やあると量りみしに、初め十六貫七百二十五匁ありしが、今  
 は百七十五匁を減し居たるに驚きたり。

六日間の安泊行に下谷の萬年町、淺草の馬道、本所の津輕原、芝の新網、及び四ッ谷の絞ヶ橋を一巡  
 したり固より其狀を盡したるといふには非されど貧の天地の一斑はかつ／＼之を記したり、今ま此天  
 地を一括し粗漏ながら觀察を下せば

形容は男女を問はず、老若を論せず、大抵は皆眼凹み顔秀で、肉は落ち骨は癭せ、書物にて見し顔  
 色憔悴し形容枯槁して澤畔に行吟せしと云ふ三閭大夫のなごりを留めたり、孤憤を極きて然るにはあ

畫師の形容

人口

らず、兼併、社會に行はれ、貧富、距離を進め、米價騰貴、生活を困難にし、金融澁滞、工業を沮息せしめたる等交々渠等を此に排擠したるなり、渠等の大部は元來賦性の惰民にはあらず。

人口の詳は得て知るべからず、食を求めて遷轉する者多ければなり、去れども衰れなりとも夫妻をなし、瘦せたりとも世帯をなし、家族の生活をなす者を見るに男女の割合常に女子の數男子より多しと見ゆ是れ果して何の理由より來るか、彼等の中最も社會立ちたる下谷の一類に就て觀るに

戸數

人員

(町名)	(本籍)		(寄留)	
	男	女	男	女
山伏町	一八四	二九〇	三三三	三一
萬年町	一七二	二五二	二八四	二九
南稻荷町	六八	一一五	一四	九
下車坂町	一三	六	一六	三
豊住町	七	一	一四	三
神吉町	五	六	九	一一
合計	四四九	六九〇	七五〇	八〇

是れ實に奇態なり、學者の一研究を得つものなり、但し、東京は女性の最も高價なる邦柄なり、氏なき

肉食

者の最も多く、塔輿の上に乗る處なり、普通なる下層の社會が已に男子を生むを重せず、女子を生むことを重すれば下層の下層は猶更ならん、甚しきは男兒をば所謂マヒキテ棄つるも知れず、此風今も彼の社會に往々行はるゝと聞く、是れ豈多女寡男の一因か。

食物には果して何を取る、蓋し一概に貧民といへど貧民中にも亦階級あり、上等の一派が昨今の食物は下米、下南京米、麵包粉、挽割麥、澤庵、茄子、鹽等なり、其下等の一類に至りては更に焉れより甚しきものあり、彼れは下米を用ゆれど是はそれすら食ふを得ず、彼れは下南京米を食とすれども是れは纔かに下南京の粉米を食とするのみ、彼れは麵包粉を食とし、是れは其下粉を食とし、彼れは尙ほ通常の澤庵を菜とし是れは枯澤庵を菜とす、其他豆腐、芋屑及び蓮屑、鹽等なり、去れど是等は此世界に於ては尙ほ普通一般の食物なり、未だ以て驚くに足らず、夫の萬年町に於ても下級の又最下級なる「中」と稱する一團の邊には牛のシヤを食とすといふ、牛の舌は肉中の最も美味なる又高價ある部分彼等如何にして斯かる贅澤を極むるやと問ふに舌には非す下なりといふ、下とは何ぞ、肉を取りたる後ち委棄すへき臟腑の部分なり、こは屠場より出づるものにて所謂其シヤ屋は屠場より取來り其臟腑を其儘に大釜に入れ煮たる後ち其佳き處は天麩羅とし、次の處は漬炙とし、最も下等なる處は三寸五六分の一片とし、一箇五厘に賣る事なり、其腥くして生膾なる常人は僅に口に入れたるのみにて忽ち嘔氣を催すへし左れども此社會には一の好食料にて後れて至る者は之を買ふ能はずといふ。

翁云く嘗て亞米利加山中土蠻の記を讀む、其中左の一書あり、歐人の一客或山中に就き土蠻の酋長を訪ひし事あり、其酋長は妙齡の婦人にして容姿衆に勝れ、異様の服裝尙ほ人を動かすものあり客自ら恍惚たり、已にして婦人は客の爲めに一牛を牽出し部下に命じて之を屠らしむ、牛介れて未だ殊せざるに婦人は刀を抜き其牛腹を抜き、織手を以て尙ほ温氣ある長き臟腑を握み出し、一塊を客に侷め、更に自から一塊を取り其儘之を啖ひたれば忽ち兩頬唇鮮血に染み、其口恰も兩耳の邊まで裂け居るか如くに見え、前の恍惚たりしものは變じて恐懼の情となり倉卒謝して立去りたり、其時衆蠻は臟腑に蝟集し争て之を啖ひつゝありき云々、と牛の臟腑を啖ふの談は此他に未だ聞きし事あらず、今ま居士の談に接し覺えず毛髮悚然たり。

○教育會て英京倫敦に於ける貧民の記を讀むに英の大我居士其貧民窟に入りし時見覺えある小兒等の其の家に居るを見て、學校には行かずやと問へば、近頃休み居れりといふ、何故なりやと問反せば、靴なきか爲めなりと答へたりと、是れに就き其人は説をなして云く

小兒の靴と其父の上衣とは屢々店賃に化し去ることあり、斯かる今日の有様なれば其靴の爲め兩親罰を蒙る乎、小兒徒既にて泥路を學校に通ふ乎の二途あるのみ、此靴一件は貧民子弟の干渉教育に付き緊要なり、無心の小兒か日々學校に通ふ爲め靴を得んといふことは不幸なる父親の大頭痛の後ち始めて解釋し得るの問題なり

と何れの世界も貧と教育とは兩立し難き勢あり、國家氏の手を煩はさざれば彼の人の子全体を如何すべきや併し天下には慈善の士ありて已か巡りし貧世界中にも亦往々教育の途を開き斯民を引て上せんと試る人あるを見受けたり。新編にては明治二十年まで學校のガの字だに聞かさざりしが此年細谷勝豪といふ人西教信者をもて此窟に投し、最初は安泊々裏に誓を講し二三貧民の子弟に授業せしか、氏か熱心と懇切とは善く貧民父兄の意を得、其子弟の心を攪り幾何ならず温習學會なる一校を起し、今は七十餘名の生徒を有せり、其教育の方法たる生徒に拂はしむるに月謝を以てせず登校毎に日謝を出さしむ通例其日謝は五厘なり、尙ほ甚しきものは僅に文久一つを拂はしむ、其生徒は大抵皆安泊に屋根代を追て還轉する漂民の子弟中最も幼稚の者にして之を提げてあるく時は日中の働きに手足纏ひとなるをもて放逐的に通學せしむるなりといふ萬年町にも亦一の學校あり、名つけて天海尋常小學校といふ其教師は坂本徳五郎といふ人なり、聞く氏の家世々慈善の人を出し氏の祖父に至り深く貧民教育の道なきを嘆し、明治六年此に帷を下したり、爾來十有八年の久しきに涉り今の徳五郎氏に至る迄一日も之を忘らす今は生徒百二十餘名に上り、其生徒の様を見るに前きの新編に此すれは學科の程度も生徒の種類も一段高き様覺えたり、校主の説を聞くに兒童の在學何れも一年以下にして一年を超ゆる者は甚た寥々たりといふ、而して殊に奇態なるは此にても女生徒の數割に男生徒より多數なり其原因を校主に問へば八九歳の女子は學公口少なきをもて家に置くは厄介なりとて習學校に入るゝより斯くは多

## 富の底

きもの似たりと、之れに因れば是れも亦追逐的の見識教育と知られたり、去れど其原因は獨り此一原のみならず、矢張輕男重女のにより女子の多きならんと思はる。

富の底は固よりいふ可きなし、去りなから人間社會の階級は上に無窮、下にも無數貧者の中富者あり已か安泊中にも會せし富者三人あり、何れも新網の中なりしか、一人は隻腕<sup>ひとぢうで</sup>乞食、一人は癩病にて腐れ落ちたる無脚<sup>あしなし</sup>乞食、他の一人は通常なり、何れも些の貯蓄あり之れを仲間<sup>なか</sup>に對し朝々に貸し付けては夕へに取り立つ、利の高きこと眼飛出るほどなれど些の貸借なれば左ほどにも感せざるか、其の中カツマイ先生は一妻二妾を蓄へたり出る時は四輪<sup>よんりん</sup>の足弱車に駕して徘徊し、入りては妻妾を側らに連ね、手下の二三者を走らして其の金を轉回せしめ乞食に不相當の奇利を占め貧の世界を睥睨せり、是れ亦た乞食中の不法者なり。

或探險者は支那に遊び萬里の長城なしといひ、或探險者は葱嶺の嶺なる貝殻を古昔登山者の遺物となし、或探險者は亞非利加内地に生獸皮纏へる者を見て有尾人種を發見せりといふ、其探險者を問へば智知名の士なり、有識の人なり、知名の士有識の人も時に斯かる誤謬に陥つ、况やをじなき大我居士の貧天地觀察に於てをや、思ふに誤解、臆測と觀察の足らざるところとは居士の覺悟する所なり、只た之に由り大方の人々貧天地の一斑を想像するを得せしめは居士の本懐といはんのみ。

饑寒窟

大我居士

予か忘年の友青天翁か知人に有福の長者あり、曾て一の貴顯と最も親しみ善し、或時事を以て其意に忤ひ、交情頗に冷脈したりければ、長者は多く別墅の内に閉ち籠りて徒らに不平の月日を送り居たり城南の楓世翁之を聞き一日飄然として長者の別墅に來りたり、長者歎ひて之を門に迎へ、書院に請して恭しく土座に推せは、翁は長者に向ひ、幕府の末年御身幕府に于仕せんとて予か家に出入せし頃御身か着用したりし紋着の單衣今も尙ほ存するや否やと問ふ、長者も心ある人を見え丁寧に其單衣を保存し居たりしかば、家内に命じて急に之を取り出さしめ、乃て翁の坐前にさし置きたり、之を見れば其の昔しは茶歟墨歟、今は只た羊裘色を留めたるに五處の大紋うつたるは或は當年の定九郎殿か遺物にやと思ふはかりの單衣なり、翁打ち首肯きて今回は更らに之れに剛はしき帯をも持ち出てよといふ家人は土蔵中の舊葛籠を探して袴の如き織物の糊の如くなるまでには幾世紀や經たりけんと思はるゝ一條の小倉の帯を持ち來れり、翁は莞爾として長者に向ひ、故人と聞るには故人の容態ありてこそ一粟の興味あるものなれ、御身は日長は此服を履きても久も振りに注人をまよめよ、長者は我が今日の身と帯と袴と履き居るも何ぞなきに對しては心の中深く感服せられたる、我輩の思ふ所

さんも失禮なまを思ひ、乃て其言の如く之を着用したり、詰つくくと打ち眺め、長者に對して言辭を改め、御身只今其服を着け、御身か其財寶家屋敷は悉く盡して人手に渡り、御身か職は一朝に免黜せられて浪人となりたりと世に知らせ、芝の新網か四谷の飯ヶ橋に住居し見よ其時誰か今日の如く御身を……サ」「……襟甚しきは「旦那様」など尊敬崇拜して來る者あらんや、悉考す可し御身が今「サ」「サ」たり「襟」たり「旦那」たるものは全く是れ位置が然らしむるなり、財寶が然らしむるなり、家庫家敷が然らしむるなり、衣服帽履が然らしむるなり、決して「天爵の然らしむる所爲には非ず、御身此に其服を着して昔し此翁か門に出入せし當時を想ひ起しなは今日御身の五内には倨傲、尊大、驕者など種々の者生出し來れるを驗出す可し、御身は近頃某君に忤ひ疎遠の際たとなりしと聞く、某君かたも疾くに其維新の頃の某君たりしことを忘却したるに相違なし、忘却したればこそ御身の言など氣に入らぬとて疎外する等の事は起るなれ、左れと其量見の間違ひたるを責めんには御身も半荷は擔ふ可しとて深く戒めて去られたる由青天翁は語りたり。

青天翁は語を次ぎて云ひけらく、妙味なる哉諷世翁の訓戒や、今日貴賤の等を異にし、貧富の品を同くせざる、其懸隔より見來れば霄壤天地の相違あり、去れども若し其の德行、智識、勤勉等の一方より見れば十中の六七までは彼れ是れ大抵同一の人種にして賤者を移して貴者の位に置けば賤者以て貴者たる可く、貴者を下して賤者に入るれば更に貴の貴なる所以を見ず、貧富に於ても亦然り、即ち知る

其世俗に尊敬せられ崇拜せられ崇拜せられ傲然我は顔を膨らまじむるものは實に是れ、惟た位置、財寶、家庫家敷、衣服帽履の所爲なることを然るに彼れの貴者富人は賤民貧人を忘れたる如く賤民奴隸となりて凡百の自由を失ふも嘗て之を顧みず、貧人凶蝗の歳に際し饑寒の慘境に迫れるも毫も之を恤まず、顧みず恤まざるは尙ほ恕す可し、或は之れを陥め、隨て之れを擠す者あり、而して社會は常に貴人富者の社會なれば、滔々風を爲すも人尤めず、此勢をもて進み行かば富貴は忒利の天まで達し、貧賤は那落の底まで落ちん、翁の如き居士の如き、貧民……貧民の味方たらん者は之を救ふにいそしませざらんや、今日之を救ふの方は貴者富人か視ぬまねし、聴かぬまねし、知らざるふりせる此の社會下層の眞狀を在りの儘摘擧して何人にも強て視せしめ、聴かしめ、知らしむるに在り、斯くの如くするも社會の上層尙ほ目を塞ぎ耳を掩ひ心を向けず、富貴の抑壓を逞くするものならば、其の時こそは御互に翁は東、居士は西、貧民黨の大旗を樹て、相呼應して義兵を擧げ、同じ人類にてありながら他の人類を困める彼の桀紂の徒を驅らんは如何に……と唾壺を碎きて論したり。

予亦固より翁と同感にて巖には深く東京の萬年町、新網、飯橋等の貧民窟に身を投し其状態の一斑を探檢し、我『日本』の紙上に於て「貧天地」なる一編を掲げしが、爾後熟く惟へらく東京の貧天地慘は則ち慘なれども浪華の滄の名にまさる名護町の一篇こそ海内無比の貧世界と傳ふなれ、之を一探せされは我國領下層社會は斯の如しと未だ俄に驚きを下す可らずと、一日根岸の隱居村翁か草廬を訪ふ、翁も亦貧

大坂名護町の貧民窟

九月十五日京  
を獲す

民の殊方なり、頼りに予か探檢の擧を賞揚し、談名護町の事に及へば、予に再探を奨進す、是に於て名護町探檢の意勃發して禁する能はず、時に大坂の虎列刺は最も其猖獗を極め、中央衛生局の報告表は其十中の七分迄死亡の實を示したり、是をもて第二の探檢行を友人に譲れば友人皆之を聽さず、社中に求れば社中も亦容易に之に同意せず、予則大言すらく虎列刺の惡疫は所在に發生せり、大坂を危しといは、東京亦危し、其懼ると懼らざるは天命なり、君等強て予を止め、若し東京に於て虎列刺に仆れなば君等何を以て予か魂魄に對せんとする歟といへば、流石は鞋、鞆、南に生れ、漂泊の生活を爲したるだけ多く物の危険を知らざるものと見え、鞆、南居士獨り善からうと許す、恰も好し居士の京都に赴くに會す、依て居士に伴れ九月十五日新橋を發したり、翌十六日京都に達し、居士に由りて鐵眼禪師を見れば禪師亦深く予か無分別を尤む、更に禪師の紹介をもて某氏に面し、此事を談すれば氏も同じく斷念を勸む、予一々其好意を謝したるも毫も初一念を動かす能はず、居士に辭して單身大坂に出て某氏に由りて復た大坂に久く住する某君を訪ひ探檢上の事を議れば君も亦人々の如く見合せよと懇諭す、予か志の終に奪ふ可からざるを見て、去らばとて名護町に入り込むの方便を教へらる、此の行是等諸氏の好意により便を得たることに實に少ならず序でながら深く謝す、此時思ふ斯く剛情に諸氏の留むるを聽かずして深入し若し此にて虎列刺に仆れもせば死後と雖も諸氏に面目なきこと多しと獨り笑ひつ、其夜は淺橋畔「ひらか」といふに一宿し、昨日京都なる「小川」の家にて調へ來りし貧天地行

十七日大坂名  
護町に入る

東西風情の異

都ての東京人は輕快なり、故に新網、飯ヶ橋、萬年町の徒も亦坦懐にして人を容る、之に反し都ての大坂人は持重なり、故に名護町に住する輩も亦猜疑にして容易に人を近づけず、百三十里を飛ひ渡り名護町の天に來りし旅鳥の大我居士も處變はれば品易はるの理りに先つ少しく我を折たり、如何にせば善く彼れか饑寒の窟中に投入し、如何にせば善く彼れか貧饑の異境を採得せん歟、と思ひ困して京都より紹介せられたる某君に就き探檢の目的を達せん爲め、饑寒窟中に一屋を借りて寓居せんと欲すれば、借家の便宜を與へられよと請ひぬ。某君云く駄目なり、此窟の風として如何に永く一つ長屋に住居するも胡亂の者怪幻の徒と見る時は、幾年月の久しきを経るも交際せざる習なり、今ま予突然此邊に内地雜居を試むも恐らく徒勞に屬せんのみと。去らば方を換へ目先きを改め、商賈に扮して日に其中に入り込まんは如何と問へば。其君云く可なるへし、左りながら此に入込む商人は限られたること株の如く、定まれること格式の如し、此株を取り、格式を破らんこと、甚だ難事に屬したりと。然らば詮なし安泊を求めて宿せんのみといへば、某君笑て云く生憎目下此窟には一の安泊あることなし已むこと無く心は子の爲めに一の旅宿をか世話せん歟、予善く危険を冒すや否やと問ふ。予直ちに問に應じ固より冒險的探檢なり、亞細亞的處穴に入らんも避ぐる所にあらずといへば、其人終に探檢專

實強し家名信

探檢便宜なる一軒の家を購置せしむる、乃ち名護町なる虎列刺病探檢の對面東田を以て宿所に充つ、去れ

と某君は堅く戒めぬ、此窟内は固より諭なし、盡の近邊にゐる物を決して飲食する勿れ、しなは必らず生命なけん、是をもて予は此に在る二週日の間、三食皆他區より取り寄せ、其他は一物も喉に容れず、之か爲り時には饑え、時には渴して屢々深く痛苦を感せしかども、今にして之を思へば此に諸君と『日本』の上に再會するを得しものは全く某君の戒めを守り、禍を口より遠ざけたりし餘慶なり、嗚呼口は禍の門、古人の金言今更にあり難し。

倫敦の饑寒窟探検者がいひし如く、今予が探検せんとする所も亦遠き亞非利加の内陸にもあらず、遠かなる北極の氷海にもあらず、言語、人種を同くし眼前咫尺の間に在りて別に一の乾坤を開き、事狀情慮兩ながら、一般社會と隔絶せられし我國の饑寒世界に於ける大坂名護町の一窟なり、抑々日本第二なの大都大坂の市内西區の中、南區の而も中央に於て、五十三驛の振出となり、八道里程の起點となれる江戸の日本橋と其字を同じして其稱へを異にせる日本橋の以南にかけ、住吉、堺、和歌山に至る要口となり、人車の往來肩々と摩れ、錢々と撃つ一地あり、之を日本橋筋といふ、其橋詰より以南名護橋に至る迄を日本橋一丁目乃至五丁目と順次に名づけし五ヶ町の内、其四丁目より五丁目に至る所を今まは橋名のみ其稱を留めし彼の有名なる名護町なり、予か今ま此内に宿と定めたる東田は即ち現稱日本橋四丁目といふ處なり既に饑寒窟中に入り、足を投するの處をも得たり、如何なる事項より手を着けん歟と探検の事項を考つ、手帳を取出て鉛筆もて事項の概要を書き付て、先づ其目安を定ける、其大要は

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 名護町の位地及廣狭 | 路次及長屋の構造  |
| 飯料水の善惡    | 名護町の名所    |
| 人口及戸數     | 土着流民擲國の類別 |
| 男女の割合     | 年齢の天壽     |
| 出生及死亡の比較  | 倫理        |
| 住居        | 屋賃        |
| 職業の種類     | 職業と勞力及賃銀  |
| 名護町の特産物   | 一日の生計費    |
| 乞食藝能者の割合  | 家居の常態     |
| 飲食物及衣服    | 貧民相互の交際   |
| 病氣の療法     | 疾病者の多寡    |
| 特性の病症     | 貧民と家主の關係  |
| 葬式の方法及費用  | 祭禮、宗教及教育  |
| 警察官と貧民の關係 | 賭博の盛衰     |
| 長屋取拂の政策   | 無上の嗜好     |



## 貧民の希望

穢多と貧人

淫賣

## 犯罪人の多寡及其種類

木賃宿の模様

衛生と虎列刺

名護町一般の特性

等なり、見當已に付き、心算略は定まりたり、いでや是れより探検者の實行を擧げて齋返らんと覺悟しつゝ其夜を此に明かしたり。

十九日名護町を遊覽す

明くれば十九日となりぬ、先づ表面より窟况を觀察するも面白からんと宿を出て足に任せて名護町の内を巡覽す其表家は並へて二階造にて東京なれば淺草馬道の地位に在り、來て見れば聞くより清き名護町か」と徐々足を進む中、視線を早く惹き着けしは左右の土店に陳ね立てたる商品なり、想ひ起す下谷萬年町の露店にて「古下駄四足にて店を張る」者ありしを「貧天地」に記せしことを、然れども斯かる露店は萬年町にも絶えて無くして其稀に見るに過ぎずして其他は神田の五<sup>てしち</sup>、稻荷の縁日に現はるる露店に劣らぬか多かりき、然るに此の土店を見れば古下駄四足を商ふなどは普通一般の商店なり、立派美事の商品なり、且つ是等の商人は流石にも勤儉的人種の流れを汲めるだけ、何れも午後三四時より開き薄暮を限り仕舞ふといふ、如何なる故そと人に賢せば、其人は打ち笑ひ何そ疑問の迂濶なる夜は燈火を點する次の費用、かゝるに非ずやといふ、な……る程と答へて先づ一齋を喫したり。

露店を閉つ

食の一字

名護町二町を一巡し去りたり、路上店頭の光景を略領し得たり、露店の過半に嚮く所は食物なり、青物、魚類及び菓子等の食物なり、其他には唯た薪、炭及び雑品少許を陳ぬるのみ、表家の商品も殆ど之と同一なり、強て其蓋を求むれば唯た其代物に多きと少きとの別あるのみ。古より衣食住は人の生活の三要素なりといふ、去れど要須の順序よりいへば、食は其第一なり、衣は其第二なり、住に至ては其第三に位せり、饑寒の境に瀕する徒か如何にして解せんかと最も苦心する問題は單た食といふ一字のみ、此窟内の露店商屋に賣るところ大抵食物の一種に限れるも亦宜なる哉。其他二町の内に於て足駄屋もなく、傘屋もなく、呉服屋もなく、洋酒屋もなく、舶來物屋などは勿論あらず、蓋し彼等は五六厘を出して古下駄を買ふことあらん、然れども七錢以上の金を投し所謂サラ即ち新の足駄を未だ穿しことあらざる可し、彼等は傘の骨子を剔り多少の貨銀にあり着く者あらん、然れども八錢の間屋張も新製のものを翳せしこと無かる可し、彼等は一錢のタマリを買ひて一睡の夢に角の夷座に遊ひしことあらん、或は口の缺けたるビールの空瓶を塵埃堆裏に争ひたることあらん、然れども十三錢の淺田ビールそれ一個も我錢をもて倒したることあらざる可し、一反三四十錢の二子の赤編、一個四五十錢の和製の帽子、心齋橋筋を徘徊したる時彼の中の學者は正札に就き讀みたることあらん、然れども是れ吾々が公侯伯子男の高尊を見ると一般なり、得んと欲する心を動かす種子にもならず、是等高等即ち饑渴を醫するより以上の代物店此にあらざるも亦怪しむに足らず、經濟學者にいはせなは

上店商品の種

需用供給の大法なりと託宣せん、今其需用最も多き上店の商品を掲げなん、其一は青物店なり、鱈節あり、薩摩芋あり、葱あり、芋あり、などいへば、凡八百八百屋の品物皆在るか如く思はれん、去れど其實節といふは煮出し殻、芋といふは肩か尻尾、葱といふは牛肉屋割烹店にて取捨て去る部分あり、見渡すところ何れの店頭にても客人多きは大根、茄子、芋、蕪、蒟蒻等の漬物なり。

殊は風呂敷

其二は魚店なり、田作の屑、寸許の蟹、何れも三四十つ、一山としたるもの、價は只た五厘なり、鱈の骨の黒ばみたる然も其類骨三四枚ツ、を是亦一山としたるもの、生魚の腸、雞肉屋の切出したる雞の骨、或は鱈の頭、鮪の骨等何れを見ても一かどの虎列刺煤助劑ならぬは無しと見受けらる、代物なり、然るに巡覽し行く中、或は大人、或は小兒、或は男、或は女、各々五厘の銅貨を投げ出し田作蟹、好むまに、一山を買ひ、袂に入れて去るもあれは、路上にムシャリ、と喚ひつゝ歩りくもあり、偶々鱈の頭四つ五つを買ひ策に移して去る一人の女ありしに、貧澤なりと感したる猜忌の眼をもて看る者多し、窟の眞状態可し。

價一厘

其三は子店なり、柿、ふかし芋、枝豆、南京豆、麵包の屑等何れも素焼の小皿に盛り、店の前面に羅列せり、其狀殆ど淺草の觀音前にて老婆か賣る鳩に施す豆に似たり、價は何れも一厘なり。其他薪炭を商ふ店は薪なれば二三把程、炭屑なれば小穴に半は程に過ぎざる品を並へたり、何れも仕

盜者くは拾

入品にはあらず、火事場より盗み來りたる物に非されば、拾ひたる焼け杭を割りたる物、否らされば塵芥場より拾ひ出したる汚穢の板切れ、又或は竿竹若くは傘の骨束束ねたる等、悉く是れ普通の所謂薪炭にはあらず。

商品の價格

予は是等の土店など歴覽する内、較々上等なる古道具屋を見當りたり、是れは土店の中に就き高價の代物のみなれば、後の参考どもなりなんと手帳の鉛筆抽き出て、一々之を書留めたり、其商品と價格を擧ぐれば

古下駄	一足	五厘	巾着	一箇	八厘
鉦臺	一箇	三厘	膳	一箇	二錢
木櫛	一箇	三厘	剪刀	一箇	五厘
總利	一箇	八厘	麻繩	一條	一錢
毛楊子	一本	一厘	煙管	一本	七厘

總計積つて拾品にて其代價は七錢あり、七錢ばかりの商品もて二割の潤益を得たりとて僅に一錢四厘なり杯迂潤の推測を下すもあらんが、其賣價七錢は皆純益なり、何となれば其物は悉く拾ふか盜むかの二方法より得たりしものなればなり、以上青物、魚類、薪炭、古道具の商人は始終同一の物を商ふ者にはあらず、朝たには道具店を閉き、夕には魚店を列ね、昨は薪屋、今は青物屋、幻出沒常なら

賣價は悉く純益なり

す、亦た是れ皆な前きの盜と拾との二方法に一切商品の源流を托すればなり。既にして瞰光地平より去らんとす

十二

群島林に隨へ

諸方に出てたる此窟の徒窟望みて歸り來る、今までは左までに見えさりし街上之か爲めに忽ち雜鬧の地となりぬ、其頭には手拭を被ふり、背には麻風呂敷の包を負ひ、左の腋には小さき籠を掻い込み、右の手もて蟹を攫み、食ひ且つ歩りく十六七の娘は是れ屑拾の女なり。箱をかづきて體を屈め、宛然「く」の字を形成し、杖を力に歸り來るは煙管すげ替の爺なり。目盲し耳聾し杖に頼りたる一老夫の「同行二人」と大書したる菅笠被りたる小女に伴はれ送り寄るは擬順禮の乞食なり。其他顯人法師ちよばくれ、を始め異行異職の老幼男女繚々綿々歸り來る、其數擧ぐるに遑あらず、日暮れ形を失ふまで茫然として之を眺めたる後ち、乃て例の虎隣館なる旅舎に此身も歸りたり、冥れ同類の一男兒。

虎隣館主人

二十日

二十日の朝た夙く起き出て、垢染みたる單衣の上に淺葱の三尺を前にてしめ、一條の手拭を肩にしたる所は何處より見るも食住を逐ふの漂泊民には間違なきも、何業何種の者の果ども判断つかぬ扮装して例の虎隣館東田を立ち出てたり、探檢の手掛りもやあらんかど宿内其處此處となく徘徊する中見出せしは彼徒の業を逐て出づるなり、勞働の難易、時間の長短を見るの便ありと注目すれば、五時半頃最先か出て去るは屑拾なり、途上に散亂せるもろくの屑を拾ひ取るは戸々未だ起きずして行人未だ繋からざる早旦に最も利あればならん、次に出かくるは煙管すげ換あり、朝飯喫て去來外に出て

朝出の次第

貴民の大集會

んどするの矢先き、出陣の用意に煙管をすげ換えんと人々の待つに乘するならん、次は鑄掛師、其次に最も遅れて八時の頃ほひ退々出て去る者は窟裏最多の藝人なり、是れ等の爲め殆んど十時に及びたりア、馬鹿くし斯かる外面の觀察をなすのみに可惜時間を費さんも行甲斐なし、いでや是より探檢の方法に一步を進めんと思ひつゝ、此日は之か準備の爲めに全く一日を要したり、既にして夜に入りぬ、四丁目の定席にて大猶亭として浮れ節を演ずる彼等の大集會場に入る、亭の入口は一間あり、中央より仕切りて半間くとし、兩傍には立番を置き、別に木戸錢を取るの男あり、其嚴重なる堅固なる、をさく井生村樓の政談演說會に臨監せる巡查に劣らず、予は大男なれば肩をそばめ、權輿になりて内に入る室の廣さ僅に二十疊はかりなるに、正面に小さき壇を設けたり、引幕もなければ詔巾もなし、只刃刺落せる四壁の薄闇く四方を圍めるを見るのみなり、裝飾を斥けて無要となせしソロモン王の遣訓を奉する人民の會場も斯くはあらしと思はれたり、四方四面の内、細き入口の隙隙の外は、臆病口ほどの窓もなければ、風の吹き入る處もなし、警察の制限と見え「總員百二十四人」と記したる定書は空しく壁上の鴨居に貼り出されたるも、現に詰め込みたる人員は百五十を下らず、凡そ一疊の場所を充たすに五人以上の人を以てしたり、左なきたに時は尙ほ殘暑の候なるに室は空氣の流通を許さず、是れに百五十人餘りの汗しみ垢つける男女陣々ど推し込みたり、新陳代謝を許さざるの空氣を百五十餘人に更に數回となく吞吐したり此生暖かなる毒臭、空氣は人に迫り呼吸の速度を急めしむ、譬へは身の

ソロモン王の遣訓を奉する人民

會場の人數と空氣

曙天星五郎、  
新門辰五郎、  
國定忠治

感情の異點

潜水器中に在りて一本の談話管より少許の空氣を排送するよりも仰は苦し、去れと饑寒窟の探検には是式の苦は何のその、固より覺悟の前なりと獨り笑みつゝこらへたり、乃て菊丸、梅丸、春女など呼ぶ者代るく、壇に登り、曉天星五郎、新門辰五郎、國定忠治の傳説を歌謡曲は其人種の高尙嗜好を現はすものなれば、聽者の志向も亦知るへし、予傍より彼等か其浮れ節を聽くを見るに、親子別れ夫婦別れ凡そ悲哀、愛惜の處に遭ふも、馬耳東風、鞭して其情を動かすこと無きは所謂紳士紳商の貧民談に對すると一般の狀あり、然るに一度火車場、喧嘩場、凡そ亂暴、混雜の處に至れば、目を眩らし、齒を切し、手を戟にし、拳を鐵にし、身恰も其境遇に接したるものゝ如し、蓋し手を棄て、妻に別れ、居を離れ、鄉を去る等は彼等の幾回となく經歷し來れる所なれば、殆ど普通一般の事となり、彼等が天良の惻隱の心は爲めに容易に動かさる頑固のものとなり居れるなり、之に反して彼等は常に社會一般の人類に擯斥せられ、時には叱しられ、時には罵られ、或は打たれ、或は逐はれ、其度毎に怨恨、憤悲、復讐、攘奪等の念を高め、終には亂暴、混雜等社會の秩序擾亂する無上の愉快とする殘忍の心大に増長し居れるなり、是れ則ち富と懸隔せし貧の所爲なり、此心一步を進むれば以て國を亂すに足れり、貧民の恐る可きは實に此に在り。

貧民の恐るべき處

此地には尙ほ他に二軒の定席あり、其興行する所は何れも多くは浮れ節、祭文の類なり、而して彼等の最も欣ひ聽くは即ち浮れ節なりといふ、蓋し彼等は之を樂しむの外に、之を習ひ得て亦一の生飯樹た

らしめんと欲するが多きに由るならん。

大我居士師資  
の弟子と爲る

外面よりの觀察は最早一巡りたり、去來や是より其内部に立ち入らんと種々に方法を案せしが、結局彼等の多くと直接し、彼等の多くと談話を取り、饑寒窟の眞味を擲するは商人となりて這入り込むに若くはなしと決心したり、然るに士的生活を爲し來りし者の悲さは物を商ふすべ頼と分らず、假令ひ少しく心得たるも此窟の商は又格別なり、寧ろ便を求めて行商學見習生となり商人の後へに隨て入り込むの外なしと思案し扱行商の種類を見るに此内にては豆腐屋、青物屋、磨砂賣、烟管すげ換、下駄の齒入及び鉛賣等の數者に過ぎず、然るに見習生付きの豆腐屋、青物屋、磨砂賣、烟管すげ換、下駄去らは烟管すげ換、下駄の齒入は如何といへば、是れは即ち一種の専門學にして見習生となる前に多少の修業を取らざる可からず、如何はせん何ぞか名案はなかる可き歟と土地の事情に通曉せる吉田といふ男に議れば、此男暫し考へ居しか、鉛賣の弟子最も妙ならんといふ、蓋し此鉛賣といふは一種の貿易商人なり、开を如何といふに此饑寒窟に於ては饑鬼等に持たす可き錢ある筈なれば、鉛屋は彼等の持ち來る缺徳利、破鍋の磁、古釘、古下駄、都ての物と鉛幾切れと物品貿易を行ふなり、去れば貿易に従事する鉛屋は其易を得たる惡像猛像を入れ來る一大箱を肩つき歩りくなり、今ま其見習生となれば此箱を負はしめらるゝなり、是れこそ屈強の方法なれと思へば、直ちに其の周旋を托したるに吉田は乃て予を以て吉田の内に居候ふ所の厄介の婿ありと觸れ込みて日頃親しき一の鉛屋に相談し呉れた

## 新給賣の扮装

るに、船屋は早速六詣を興へたりければ身は愈々此日より給賣の弟子となる去來さらば是れより行かんと、例の單衣に三尺しめ、漂泊的人種の行装して行かんとすれば、吉田は暫しと予を止め、それでは甚だ胡亂臭し、探偵と見解められんも知れずと、直ちに印絆纏、股引及び脚半とを出し與ふ、忝けなしと謝して股引を取り、ツボンを着るの考へにて兩脚を投すれば、全く後ろ前に穿きたり、家内の者は之を觀て轉ひこぼして打ち笑へり、漸々の事にて正則に之を着け了り、麥藁帽子を阿彌陀に被り、之に副はしき草履を突掛けたる其様は給賣といはんより寧ろシャモ大工といふ方適當ならん、仕度調ひたれば吉田は予を伴ひて四丁目なる或る路次の中程に至り長屋の一に這入りたり、是れ則ち船屋のうちなり、吉田は予を尻目に睨付け、御話せしは「此奴」なるか今日此に連れ來れりと主人に陳へて托したり、予は噁りて破綻を出さんことを恐れ、いと簡單に「何分宜しう」と挨拶せり此時始めて安宅の關に差掛りし辨慶義經を想像せしむる能力を生せしめたるも心可笑し、師弟の契約已に成り、目を揚げて此家のすまぬを伺ふに、室は五疊敷一間にて、前面入口の一半をば流しに用たり、器具としては十箇許り流しの邊に散在せるのみ、室の上には一箇の古葛籠あり小高き棚に一体の地藏尊を安置し奉り二三枝の花を供へたるは我師の殊勝さを想見せしむ其側には各々高さ一尺四五寸許りなる同形の箱二つあり、其一面には各々三箇の抽斗あり其上には更に五升樹大の給を入れたる箱を重ねたり、重さは大抵八九貫目以上のものなる可し、是則ち商賣道具なり、家族を見れば夫婦に小供三八あり、外に

## 給賣の生居宅の光景

## 師は是れ十津川の郷土

夫婦者の同居人と覺しきあれは一家都合七人なり、五疊の宅之に植うるに七人、以てすれば、一疊の疊以て一人半を入れしむ可し、去れどこは饑寒窟の常態にして怪しむにも足らず、主人を見れば年の頃三十四五歳の男にて今こそ給賣とまで零落れたれ、元は三代正統の天子を南山に守護し奉りし者、其の子孫にて大和十津川の郷土なりと商戰の門出に系圖を名乗る、兎に角其師を得たるもの哉と可笑しさを堪え、其指圖を待ては、是れより商賣に出掛可し、御身は之を昇きてよとて商賣道具を授けらる合點なりとシャモ大工的新給賣は麥藁帽子の上より手拭もて頬被りして、其八九貫目の給箱を荷つき、八寸許りの管竹を手にてキリキリと振り鳴らし、船屋の師匠か後へに従ひて、何處ともなく先導者のまにまに歩み出せり、嗟乎予れ臍の緒切てより始めて此に貿易の道に進入せり、青天翁などに聞かせなば、是れ焉んを異日君も亦南に貿易家となるの前兆に非ざるを知らんやなど我田に水を引く可し、師匠の船屋はサツ／＼と前路に向ひ進み行く、弟子の新給屋も亦之に後れじと急ぎ行けば早く四丁目を過ぎて今宮村といふに至り、五百餘坪もあらんかと思ふはかりの一大塵芥場の前に出てたり、師の船屋は尙も進み其一畫の構内に入れば、予も亦從ひ之に入りて見るに、目に餘る塵芥堆積して一丘山を爲せるに初秋の烈日光熱を送りて上より照射し醞釀せしむるものからに、汚毒の蒸發氣は得もいはれぬ惡臭を放ち烟の如く立上る、之を視てさへ嗅きてさへ新給屋などは已に慄然たるに、七八人の男女其塵埃山上に登り坑夫の金を掘るか如く、熊手をもて其中を掘鑿し、藁屑、木屑、瀬戸屑等

此世からなる 掘出すに随ひ振り分け居る、其様真に此世なから、餓鬼道なり、此處を例の管竹を一振り振れば十

二許りの小娘に八つ許りの小曹兄弟と見ゆるか塵埃山上に熊手を投し、一目散に駆け来り「これめえて  
給と釘との買  
んか」物を出す、姉の貿易品は撥籠甲の齒抜け櫛と鍋底及び數本の釘、弟の出せしは鍔の折れ及び五  
寸許りの電信線の切片なり、善しとて給を姉に二つ、弟に一つ與えたり、續いて来る者なければ乃て  
構の外に出つ、師の館屋が行く／＼語るを聴けば、元此邊の小供は朝に晩に館屋を待ち、管竹一たひ

搖かせは十人位ぬは立どころに集まらぬ事なかりしに、世の不景氣に連れ屑も亦少くなり、隨て此邊  
の商賣も亦寥れたりど、不景氣は終に微かなる塵埃の末にまで及びし歎、去て一の路次に入る、薄暗  
き室内より女の聲して「館屋さんこれ身えてんか」と呼び止むるあり、之を見れば四十餘りの病み疲れ  
たる一婆なり、何物をか出すと見れば玩具の玻璃瓶に釘四五本及び鍔かへりたる剪刀なり、剪刀は齒  
焼けたれば用に立たずとて突き戻し、釘と瓶にて給二つを渡せば、慥かに不足なりとの顔色見ゆ、斯

くて五六の路次を廻る中、火箸一本出して貿易を求むる翁あり、癩病なるにや、肩毛頭髪悉く脱去し、見  
苦しきこと限りなし、給三箇と易えなんやといへど、聴かず談判成らずして立ち別れ管竹鳴らして行  
くほどに、後ろよりして又た「かえてんか」の聲起る、顧れば八歳許りの小曹にて頭は一体蒸着を被り  
垢染みて物質さへ定かならぬチョッキ一枚のみを着けたるが一握りの紙屑を出す、紙屑とは取易えぬ  
と断はれば、別相作て去る、ア、是等には一履も與えたとしと思へも、嚴師の許さる所なれば、小

談判成らず

忍ひされは大謀を亂ると氣をかえて、去て今宮より木津、難波を経て、有名なる西濱の穢多村に入る

交易したる物

此の間交換し得たる品は何々ぞ、ランプの缺ホヤ蝶番ひ筭の折れ瓶の缺、水晶玉の缺針金煙管、雪  
踏の打金錫の砵、柄の脱け落ちたる金柄杓、鋸及び剪刀の折れ、鐵の輪小刀古き鑿、杖の頭懸葺の口  
提燈の鎮佛壇の金具、其他金細致の金具、蝙蝠傘の柄齒抜け櫛、鍔等に至るまで價の低きは給一箇、高

六時間に十八

きも十箇を廻るなし、更には少きは一厘より多きも一錢を出てさるなり、今日しも午前八時の頃よ  
り、午後二時と覺しき時まで交換したるを金額に積算すれば十八錢餘の商ひ高にて、其中現金にて  
賣りたるは僅に一錢七厘なりき。

東來の探検者、今參の新館屋は朝に虎隣館を出て、館箱を擔ぎ管竹を振り、泛々漫々、東西、北、師  
の之く所に追隨し、午前八時の頃はひより正午十二時を過くるまでに名護町、今宮、木津、難波及び西  
濱の穢多村まで、入らざる路次なく、問はざる長屋なく、貿易の途否な探検の爲めにけふの半はを費  
したり、是れより引返して復たひ沿路を叩けば腹の加減は午後二時頃となれり、一先つ歸りて兵糧を  
使ひたる上更に他方に押出さんどて師の館屋が長屋の前まで来り、予は館箱を肩より卸し後刻を約し  
て虎隣館に立ち歸れば、晝の辨當早く己に届き居たり、去來一飯せんと一たひは引寄せしか朝來感能  
を打ち来りし饑境の慘狀は宛然として眼中に横はり、路次／＼に漲りたる汚穢の惡臭は紛然として鼻  
頭に留まり、神氣濶々として何となく食氣付かず、即ち一脈の麻神劑もて之れを掃はんと吞めぬ煙草

を二三服くま蒸らして暫し其處に横たはれば、慣らぬ労働の疲れにや其儘ま々々々と華膏國に伴はれたり、暫し、て裏長屋の喧嘩の聲に驚かされて目を開けば三十分餘も約定の時間を経過したり、南無三寶後れたり、半日法師はつじつといはれんも口惜しと急ぎ師の許に至り見れば、師の館屋は出掛けんとする様子もなく、商賣道具の館箱を拭き居れり、如何に是れより出掛けなんやといへば、館屋は落ち付き掃て世渡上よわだかの道理ぢやうりの講義をなして云く元來已か本職は浮れ節語りなり、毎夜定席に出て若干の錢を得來れり、去れど其れのみにては間に合はねば晝の館屋を兼業とし親子五人の生命を繋ぎ居れり、然るに今日しも御前さんの見る通り昨今の不景氣にては館屋も亦取果はくしからず、去れば明日あすよりは七味唐辛子なながらしをも兼て商ふつもりにて今より其仕度に掛かる所なり、是れより御前さんは此處に居る男につきて廻るへしとて其男に紹介せり、此の師の館屋か心切なる更に予に告げて云く全體館屋の商賣は利純の殊に薄き者なれど御前さんは獨身者なりといへばかつゞ生計立ち行く可し、先づ三日ほど見習ひたる上は道具箱を借る工風揚要なり、館の外に己か如く唐辛子をも少々宛仕入れ置きなば都合よけん杯いと心切に説き教ゆ、予は深く感嘆せり、若し予れ眞の館屋となり日に此館屋か得意の先きを巡りなば左なきたに不景氣といへる貿易高の又た幾分に影響すへし、然るに彼れは憂も之れを顧念せず已に洒然として得意の地に導き、又醇然として商買の蘊奥を擧げて之を授け、何分子をして、一個の生計を生てしめんと欲するに汲々たり、是れ眞に人類共存の道、博愛歸仁の理を其天に有するものなり

館屋先生の講

一世を通視すれば貧民救助の議論を唱へて而して弊衣せる親戚の其の門に來訪するを惡みて出入を禁する者あり、慈善の會社を創設して自家の私利を營む者あり、陽に千圓の義捐を誇りて陰には十萬の公賚を私せる者あり、彼等の臍下に若し一寸の天良あらば豈に此館屋に愧つ可からずや、嗚呼、嗚呼、是れは「貧天地」に戴望のヨカク、館賣ありて予を世話すへしといひ、今は又「饑寒窟」にヤリク、館屋の厚情を蒙る、前生豈に館屋と好因縁ある歟、世途を閱し來れば名利社會の輕薄なるは恰も蠅を咀むか如く、棄世天地に情味ある却て館を含むか如し、居士到る處常に彼に斥けられて是に愛せらるゝより見れば予れ亦廊廟の土に非ずして將た林泉の人なるを知る。既にして今ま紹介せられたる新主人に伴はれ復たひ館賣の途に上る。

路次の入口下  
狀方誌

又も名護町を出て難波新地の眺望闊邊を徘徊す、午前に一たひ到りし地なれど路次くくの入口一ならす、或は「丁」字の形をなし、或は「中」字の狀をなし、「串」の字に似たるもあれは「州」の字の如くなるもあり、其曲折せるは「正」字に似、其並連せるは「而」の字に似たり、去れば此に久しく住する者に非されは幾回出入するも方角を確むるを得ず、警察は取締上甚だ困難なるを以て新建の長屋に联接を禁したりといへど既に在るものを如何ともする能はず、而して饑寒窟の住民の多くは實に此複雑幽關の路次みちなるを荆せり、何となれば、賣淫、騙兒、盜竊の類は此構造の複雑幽關に頼たはなり、うべな世界の闇き處は罪惡の伏する處なりと、扱行きく路次の較し上等なる長屋に入れば到る處十七八な

闇きと罪惡





## 殘飯屋

慈善の一端にも知れずと獨語<sup>ひとりごと</sup>々々シャマ大工的の行装して虎隣館を立出てつ、兎ある街角に至て見れば辛屋の店前人の胸壁を鉄けり、去れども買ふ者は割合に少なくして見る者其多きを占めたり、辛の如も尙ほ飢を饜するに足るでもないふ歟、去て一の殘飯屋の前に至れば、殘飯殘菜を買ふ者店前に麤集せり此殘飯屋とは鎮蚤の殘飯殘菜を受け來りて鬻ぐものにて窟中に三四軒あり、今更見かけたるは一なり、店前には杉の丸太をもて手欄<sup>てり欄</sup>を設け、中には飯なり菜なりを一の土取<sup>ととぎ</sup>籠に盛り客を欄外に引受けで一々賣渡すなり、こは客の先後を争ひ内に込み入る混雜を防ぎ、且つ此混雜に乘し飯菜を窃み去る者を防くなりといふ、予か店初に行き掛りし時欄の前面には數十の男女麤集して一寸の餘地にあらす、然るに内の様子を伺へば其れかと思はしき飯菜なし、代物なきに斯く一時に衆人詰り掛けたるは何故ぞ尋ねれば殘飯を賣るは午前と午後との二回なるも、午前の殘飯には前後よりの腐敗せる宿飯を混して賣ると往々にしてこれあれども、午後のは必らず其日の炊煮物なれば之を得んとて斯くは混雜するなりといふ、彼等の狀境左もある可き事と思はる、今夜可笑しかりし予を探偵と視誤まり喧嘩をやめたる一事なり、時は十時の頃なりき、予は已に枕に就き漸く<sup>おぼろ</sup>眠を合せんとする折から忽ち裏の路次に當り喧嘩の聲鼎沸し來る、「腕づくなら來て見ろ」と呼はるれば、「何だ畜生め見やいかれ」と叫ぶあり、罵る聲、擲くる音、長屋の者か仲裁する騷擾する等一の波瀾を湧出したり、好奇の心に此身を揺り起され急ぎ其境に至り見れば、忽ちにして波收まり瀾平らき元の恬靜に歸りたり

## 探偵と誤まり

は混雜するなりといふ、彼等の狀境左もある可き事と思はる、今夜可笑しかりし予を探偵と視誤まり喧嘩をやめたる一事なり、時は十時の頃なりき、予は已に枕に就き漸く<sup>おぼろ</sup>眠を合せんとする折から忽ち裏の路次に當り喧嘩の聲鼎沸し來る、「腕づくなら來て見ろ」と呼はるれば、「何だ畜生め見やいかれ」と叫ぶあり、罵る聲、擲くる音、長屋の者か仲裁する騷擾する等一の波瀾を湧出したり、好奇の心に此身を揺り起され急ぎ其境に至り見れば、忽ちにして波收まり瀾平らき元の恬靜に歸りたり

翌朝に至り長屋の者特に予か虎隣館を叩きて予に對し「昨晚は甚た……恐れ入る」杯甚ど丁寧に幾回か拜謝し去れり、予は更に何の謂ひなるやを解せず、多分人違ひあらんと思ひ後に之を宿の老婆に語りしに是れ全く予か履く服裝を換へて朝夕出入するを以て、早くも彼等は予を認めて探偵なりと墮定したるに依るといふ。

## 二十三日

二十三日天快く霽れ渡れり、今日しも彼岸の中日に際したれば夫の有名なる天王寺に詣つる者甚ど多し、恰も善し此日は予か亡母の七年期に相當せり、然るに饑寒窟の旅寓には花を手向け香を供へん場處さへあらざれば、形ばかりにても<sup>えさ</sup>回向を頼まんと追遠の心に予も天王寺に詣てたり、是れより前き予は探檢の途に上らんとする時惟一人の姉に束して亡母の祭典を托せり已にして羯南居士に隨て京都に出て林丘寺の鐵眼禪師を見る、禪師の流離艱難、母と妹とを尋ね二十餘年海内を巡りて終に會せず一朝身世を棄て、林丘寺に入りし経歴は曾て『日本』の紙上に連載したる「血寫經」にて疾く知りつ、心私かに其人の性行を喜ひ居たり、眼のあたり其人に接し之と一室に談すれば、焉ぞ知らん其人は予か幼時仙台に來遊し、暫らく予か家に寓せしことありしとて予か一家の近況を問はるゝに會ふ乃ち其間に應し一家不幸の顛末を語れば其事亦頗る禪師の事に類する者ありて彼是遭遇の奇なるに驚けり、予か父は予が幼かりし時此世を辭したれば其顔をも知らず、予は兄弟四人にて二兄と一女兄とあり、予は即ち末子なり、戊辰の役長兄は藩軍に屬して白河口に戦ひ、小兄は十六歳にて星村太郎氏に隨て箱館

に走りて五稜郭に戦ひ、戦ひ敗れて後ち各々國に歸り、旋て而して曾没しぬ、其の時姉は十三歳なりしか一日惡漢の爲めに誘拐きようかくかされ忽ち其所在を失ひたり、母は已に二男に死別し、又一女と生別したれば、弊々只た幼弱なる一人の予と相依り、悲泣哀痛の中に百方姉の動靜を搜索せしかども終に得ず、母は其後憂苦の中に亦此世を辭去したり、爾來予は實に形影相用するの人となれり、而して母の死後は東都の客となり尙ほ姉の死生を知らずして數年を経しか、天か時か昨二十二年の九月、一陸軍士官の靈力に由り端なく野州黒羽に於て二十餘年來未見の姉に會合するの福運を得たり、此時予か心中の愉快は予未た之に比較するものを知らざるなり、是れより予は始めて同胞の一女兒を有する人となれり、而して本年本月本日は亡母の第七回期に當れば相伴ひて郷國に赴き其墓を修し祭典を擧げんと約せしか會々此饑寒の窟に遊び、期する所を果すを得ず、是を以て姉には東し、予も亦天王寺に心祭を取りたるなり、佛菩薩如何に哀れと知ろし召せ。此日天王寺に數多の乞食を見るに五歳より幼からんと思ふ小供なく、又十二歳より以上ならんと見ゆる青年の徒も稀れなり、貧民の大半は惰民なりとの説聊せつりやうか疑なき能はず、予か天王寺の門前より生玉に至るの間に算へ得たる統計は左の如し

	五年以上十二年以下	十二年以上三十年以下	三十年以下七十年以下
男	五十六人	六人	十二人
女	二十一人	八人	九人

二十四日 二十四日天氣いと霽明なり、前二日一日は雨の爲めに休み、一日は亡母の日にて亦憩みたる恢復にて

て此日は朝方に早く師の館屋か許に至り、例に由りて館箱を擔ぎ名護町、今宮、木津、西濱、羅波の路次々を探檢し、午後三時頃虎隣館に立ち歸れり、此前後の兩日館屋行を賦したるにて頗る地理を講明し、名護町に最も接近したる今宮の邊りに一二軒木賃宿の看板を掲げたるを認め得たり、因て熟らしく思へらく毎夜同一處に信宿して木賃、安泊、屋根代の宿を洽く訪問せざらんは饑寒窟探檢者の本意に非ず、良し今夜より虎隣館を出て木賃を追て到る處に宿せんと、某君を訪ひて此意を談すれば某君之を制して云く危し、探檢固より冒險の業なれど饑寒窟の事情強かち安泊行に由りて探檢し得らるゝものに非ず、御身昨今此邊にて日々出す虎列刺患者の數を知らずやとて一々其狀況を擧げて深く戒めらる、其好意に敵し得されは匆匆辭謝して此を出て、更に吉田か許を尋ね某君の忠告を擧げて之に語り、改めていふ某君の言道理至極なれば木賃退逐の安泊行は暫し見合せたり、左れと一夜ばかり安泊に投せしどて虎列刺の神にも祟られまじ、彼の安泊中に就き最劣等の家一軒を教へなんやと問へば、吉田は首を振り、否なく是れ等は所詮貴殿などの遣入らるゝ所に非ず、奴等所用ありて時

に是等の家に到ることあるも立談の間さへ其臭穢に堪へざる程なりと答ふ、予乃ち復たひ之に對し其息穢は西濱に較へばは彼是孰れか甚しと問へば、西濱よりも甚しからん、且つ兩三日前にも其内の一軒よりは慥に虎列刺患者を出したりと聞けり、貴殿強て其意あらは二週間も經なば物のためしに一宿

木賃宿に投し  
て虎列並に翻

を試みて御覽せよといふ、其言人聽に傳ゆれば予が探檢の意は愈々動く、此時予が無形の心は忽ち無聲の辭を放ちて左の如く明言せり、乃公の志既に決せり復た言ふこと勿れど、乃ち左様かの一言を此に遣して吉田に別れ午後七時半頃ツト虎隣館を出て、足に任せて今宮に赴き山本といふ一の木賃宿に投せしは是れ一代の失策にて、嗟予れ虎隣館を出て虎館に宿し端なく虎列並に瀕したり、此宿屋は裏れなれども二階屋にて、幽かなれどもランプを點したり、扱は貧世界の鹿鳴館なるかと喜ひて這入りしは庶でなし、即ち是れ虎隣館とは後に思ひ合されける、表てに掲げし金モールを左右に排して内に入り一夜の宿を乞へば愛想もなく宿帳を取出して郷貫姓名の糺問を被る、即ち之に應答すれば、次には屋根代を先づ拂へど命せらる、恰も法廷に引き出され審問の末罰金を課せらるゝ想ひあり、承知せりとして二錢を投げ出せば始めて疊の上に薄き一の煎餅布團を示してスゲなく此に寝ねよと指圖する嗟普通の旅宿なりせば煙草釜も出てん、茶も出てん、茶菓子も出てん、浴衣もこん、風呂にも案内せん、精熊も出てん、杓も持ち寄りらん、御世辭も聞かん、明朝の車も問はる可し、按摩の天機伺も出てんに同じ世界の同じ地に變れは變るもの哉と燈閣して數行愚痴の涕を垂れ四邊に心を配れば呷喝を齎人の多きや卑陋汚穢の合客都て十五六人に餘りけり、尙ほも影闇き燈火の下より透し視れば疊は一樣に土溼青を塗りたる如く黒く滑かにして光澤あり、坐敷は全く一間に非ず、障子襖の建付けなれど縦横に渉れる圓の木は空しく意識の上のみに三室なることを承認せしめたり、客の中には飯米を持ち

木賃宿の光景

三疊敷に五人  
の賓客

賓客の種類

來り自炊する者もあれど萬年町や新網の如く道具を有し餌を負ひ此を城郭とする者には非ず。予は曾て東京の「貧天地」を武者修行して一疊一人は安泊の大法なることを熟知せり、當時深く此法の嚴酷なることを感觸せり、今夜此饑寒窟の安泊に宿するに及びて始めて尙ほ夫の「貧大地」か貧人を容るゝの寛なることを覺りたり、此屋は實に三疊の席上に五人の客を平行に寝ねしめたり即ち是れ徑一尺八寸は一人一夜の城郭なり、時に此三疊の中に枕を並へて平行に横はりたる五人の君子は果して是れ如何なる種類ぞ、端より數へて第一、第二は壁に面して寝ねたると燈火の影闇ければ容易に其人體を辨せず、第三に寝ねたるは確かに認めたり、年紀凡そ二十五六、其色は赭赤にして今戸製の坏様子の如くなるに、滿身點々瘡瘡の斑痕を印し、脛部より以下は渾て泥土に塗れ、其泥は固結して巢くみたる燕窩に似、緒く卷茸たる頭髮は長く垂れて面貌さへ定かならず、滿身一の布片をも着けず、赤條々のまゝにて横たはれり、第五は今こそ空位なれ、主人既に定まりて外出中なりと見受けらる、予は第四に割り付けられ身は終ひに第三第五の間たに落ちたり、即ち第三と第五の兩隣とは手、手と觸れ足と接するの中に在り、之を一見するや心身共に戸外を望み早く脱奔したきの思ひあり、忍ぶ可き所は此なりと瞬間に勇氣を呼び起し、「觀ぬ事消し」の金言を楯とし眼を閉ぢ奮然として床の中に這入りたり、時に右隣の裸漢は夫の一山五屋の小蟹を揚へ來り、直に之を枕許なる土溼青的の疊に置き、床の中より手を延へて之を覆みホリくとして咀嚼る音は耳孔を貫きて神を打つ、是れ只た眠を妨く

學と手足と足

三種の臭氣一時に發り來る

るのみ、何の氣にする事かはと予れ自から我意を誘ひ他事に一轉せんとすれば、生憎に此屋に入り來れる時より吉田か語りし所に違はず、一種の臭氣鼻に着きたるに(其一)、頭上に並ひたる三つの便所の時候の熱さに醗酵せられて其含有物を發揮するあり(其二)、之に加へて直ちに我枕の許よりは腥膻くさなる腐壁の臭氣を送り來り(其三)、右側面の一帯よりは裸漢か長大の身軀より發せし酸敗の汗臭あせ紛々として親しみ寄る(其四)、臭即是空と悟らんと欲せし頑固の嗅神經も衆多の汚臭に抗し得ず、敢えなく之を頭腦に導けば頭腦は忽ち岑々として煩悶苦痛を惹き起さんとす、是はかなはじと絆纏の袖もて固く鼻を掩ひ暫し之を支へたり、此時裸漢は腹膨れたるものと見え、轉一顧、寝反りて面を此方に向けお前さんの御職はと問ひ掛けたり、予は此れに一驚し心身同時に慄とせしか、左丘明流に解釋すれば凡そ此の社界に在りてはお前さんと稱するは人を敬ふなり、御職はと問ふは一般の禮なり、彼れ己に敬と禮とを用う、應せざらんは義に非らず、且つ窟に入るの意を失ふなりと、乃ち服裝の許すところ宿帳の記する所に従ひ、大工なり、と答ふれば、彼れ頗る予か職業の高尙と良好を羨むの色あり、更に私は車力といふ、然れども其談話と其風体より察すれば、彼れは合力車力とて街上に佇み、コトコト以下の青錢を得て車力の助成を爲す者なり、是れより少し前、第一の地を占たる男は外に出て、歸り來り壁に而して寝ね居たるか、普通の嗅神經を具ふる者誰か此室の息氣を感せざらん、其男も堪えずやありけん、此時突然予に向ひ、大工さんお前は此宿は始めてかと叫びたり、左様今夜か始しめてな

大工と許稱す

と答ふれば、何と臭うはかまへん歎と聞ふ、如何にも臭し其第一の發讀者は實は汝に非ず拙者なりと肚裏では答ふれど、グツと平氣に之を受け、風邪の爲めか別に左右とも覺えずと答へたれど、其言愈々平かにして其心愈々安からず、如何にして此一夜を徹し得んやと苦心したり。

向は且つ不平あり

宇宙間に存する萬有的中、人類の社會ほど階級多くして情態の變易せるものはあらざる可し、一概にいへば貧民窟なり、然るに此貧民窟中等しく木賃宿にして今夜宿せし此屋の如きは東京にてはやどらんと欲するも絶て無きはと穢なきどころなり、東京と大坂とは斯くも相違のある者かど心に懇く／＼思ひ居しに、是れほど穢なきは大坂とても極めて穢なるものと見え、彼の第一に寝ねたる男は不平極りたる聲を發し、昨晚とまりたる金毘羅社前の宿などは三錢五厘を拂ひたるに坐敷も善く、蒲團も一枚敷にして中々立派で豊かなりしに、僅か一錢五厘の違ひにて今夜は斯かる坐敷に置かるゝ上に、斯かる蒲團に寝かざるとは回り合せの悪ろきとはいへ、宿も甚だ非道なりと叫びたり、彼等饑寒窟中の人、終歲此邊を城郭とする者にして且つ此言を發するに由れば、此宿の如何も想見す可し、予をして眞成の貧民社會中の人ならしめば、此に投する二錢をもて濁醪勲杯を引傾け其儘ぐつと野宿す可し其方幾何の愉快ならん、清風朝月不用一錢買玉山、自倒非人推とは甘くやつたり、李白めも一度は經驗し居つたなど襄陽歌など憶ひ出て聊か苦痛を慰めたり、斯かる處に第一の男は不快の餘りにや終に一聲ア、遊びに行きたいと絶叫せり、此絶叫合點となり、十五六人の賓客一同未だ大抵眠らぬと見え種々

夜半の大紛擾

貧民社會の  
思及希望

食と色

の述懐を始めたり、吁是れ彼等貧民社會の意思と希望を觀るの好機會なり、何事かを語るやと耳を澄ませば、遊ひに行きたいといふ遊ひとは彼の陰獸を弄ひたしといふ意にて、忽ち一人之に同意すれば又一人は後の室より六錢なれば先つ可なりなど説明す、説明已に六錢にて先つ可なりといふを聽けば尙ほ其以下あるを知り得へし、然るに此話は政事社會に行はるゝ時事問題の如く忽ち起り忽ち消えて更に一箇の八錢多き食慾問題に移りたり、古より食色は人の大慾存すといふ、去れど色慾は胃囊膨れて然る後ちの話なり、彼等が無敵の境涯に居ながら、割合に色慾に淡泊にして、惟だ食慾のみ濃厚なるは全く之が爲めならん、一人あり、上大和橋より戎橋までの間に於て毎食物店に就き一店一品宛食し廻ること出来へきや、との問を起せば、予が隣の裸漢之に應じ、开はいと易き事なり、己は嘗て八百目の西瓜を平けたることさへありと答へたり、是れより黒砂糖二斤を舐め得る歟、醬油五合と油五合とは孰れか飲み易かる可き歟、一時間歩みつゝ盛饗麥一つと蒸籠一つとを食ひ得る歟、等雜多の問題紛出せしか、最後の問題は金か欲しいといふに在り、全會一致、何れも同意を表せしか共「如何にして之を得へき歟」の一問に至りて衆皆暫し黙然たり、うべなく此一問を彼等は正當に解釋し得ざればこそ饑寒の淵には立つものなれ、今暫し緘黙したる口頭より如何なる意見や出て來ると片唾を含みて聴き居たり、此時裸漢は考一考せし後ちアツ錢にあり君かんに虎列刺病者の態夫となるに若くものあらじと發言せしに、一番の男直ちに同意し如何にも之に若くものあらじ、一度擲けは十四

問題紛出

室が欲しい

人生年老て虎  
列刺擲けと成  
れざるを嘆す

人生の幸不幸

錢なり若し日に三度擲くとすれば甘ま／＼四十二錢の大金を一日の内にセツメ得へしと賛成す、六七人先きに寝し煙管すげ換の二老夫あり、之を聞て嘆して曰く己れも之を望むや久し、現に昨晩まで此家には其擔き人足とまり居たれば、其人に頼み隨て詣所まで出掛けしも、力量足らずとて斥ねられたり、最早年寄りては爲方なし、お前達は何れも血氣盛りなり、試みに行き行きて頼み見よ、昨今其病者ど死人とは著しく殖えたれば爲事も利得も亦隨て多からんと、是等の會話に更深く関け、後は駟聲の轟々として岸打つ壽にまかふのみ、嗟虎列刺の毒症は天下の至危なるものなり、之を聞くたに人は皆な衣を拂て立たんとするに、自から好て胃さんとし、胃し得ざるを遺憾とする彼等の境涯悲しむに堪えたり、去れど居士の知友には班超定遠自から期し、好て萬里に蠻烟瘴雨を冒すもあり、對比し來れば彼れ是れ左まで大差を見す何ぞ獨り虎列刺病者の擔夫に怪しまん、喜ぶ所は斯かる境涯に身を處して斯かる冒險の事を取るも尙ほ正路を行かんとする彼等か平生の志にて、惡む所は貧民は惰民、貧民は惰民といふを口實にして願みざる肉食者流のツヤ面なり、其中彼の一番の男は餘程神經質の者で見え眠りもやられて起き直り、ア、苦しい、若いうち早や此様では老年の後ちか想ひ遣らるゝと尙ほ獨語ちぬたり、之を聞きて予は深く人生遇合の幸不幸を感じ窈かに絆纏の袖を濕はせり。既にして夜は次第に深けゆきぬ、屋裡に滯積せる自然の惡臭、頭上に三箇所立ち並へる雪隠の汚臭、殊に不規則的飲食の結果とて彼等か終夜絶えず之に出入し其戸を開閉する毎に一段煽揚する汚臭、且

の其中にて起す風雨の悪聲、裸漢が軀體より發射する汗臭、交々襲ひ来るか上に先程より裸漢が食せし蟹の腥氣を帯ひたる呼吸の酸敗の空氣を鼻吻吼頭より容赦なく予か面上に瀉くあり、かなはしど後ろに向けば、今回は其腥膈の呼吸は更に肩のあたりを持ち來ること、藁籬の風を送るに異ならず、已むことを得ず主人の無きを時とし、第五の空位を兼併し僅に身を此方に寄せ、暫し鋭鋒を避けんとすれば、表の方より三十五六の車夫体の男高らかに鼻誦歌ひ此方に入り來るあり、是れ則ち今ま借りたる左隣第五席の合客なり、扱は見尤められては而倒なりと身を一轉して舊の席に返れば、新入の男は代て第五席に横たはり酒氣紛々として更に一悪臭を添え得たり、進退維谷とは此事なり其谷底に、蹲まり、又暫し支を見たり、然るに此の時まで予は兩隣の客と責ても衣一重も隔て身体四支の肉薄するを避けん爲め、裸漢が宵の間に屢々諫めしにも拘はらず、絆纏股引を着けたるまゝ寝ね居しか、前刻より種々不快の感覺を惹き起したる度毎に全身より横生せし冷汗沁々衣類を浸し來るありて終に一種言ふ可からざる腹痛を催したり、是れこそ「或は」ものならずやと、急に護身の藥劑を服し手拭を取り腹部を緊帯したれども痛みは次第に益々烈し、忽ちにして下瀉を催し、忽ち又嘔吐の氣を起す、卑陋極れども雪隠に通ふこと三回にまで及びたり、嘔吐は僅にこらへ止めたれども腹中は愈々雷鳴して尙ほ沛然の雨氣を含む、手をもて試みに臍下に當つれば厥冷極りて微温もあらず、ア、可笑し、愈々虎に崇られしかど蒲團の上にドツカと坐し、藥を含み腹を摩擦し煩悶苦痛する中に氣息は次第に噎々として

大我虎列拉に  
嗚呼

進退維谷

客星犯帝座

頼み少なくなる心地なり、去れど兩隣も合客はモルモットの如く熟睡し嘗て之を知らざるのみか、予か一たび雪隠に通ひ、歸り來りて舊處に至れば裸漢の客星何時か帝座を干し、帝のましまさん所もなし、詮方なさに頭足の位置を轉倒し、彼等の足底の邊を枕とし悶へながら横たはれば、富春山中の客氣取りか、裸漢は屢々燕窩の如き泥足を擧げて痛める已か腹上に遠慮齋釋もなく打ち卸す、苦くもあり腹も立てど争ふ氣力さへあらずれば、後には煎餅蒲團を取りて腰に纏ひたるまゝ壁下に座し終に煩悶苦痛の中に此一宵を徹したり、幸にして曉天に至り、痛み去り吐瀉の氣止み、体温臍上に昇りたれば、茲にホット一息し始めて蘇生の思ひをなせり、吁危かりし今一髪にて眞性的虎列刺とならんとせり好し其れ眞性的虎列刺ならずも今ま一步を進めなほ己は之を其れなりと自認し、敢えなき最後を遂げんとせり、若し此宿にて仆れんか、「饑寒窟の探検者大我居士虎列刺に罹り窟中に死す」といふ一行の電報は『日本』の紙上に永く讀者諸君との訣別となりしならん、天運の尙盡きざる所か、惡劫の未だ滅せざる所か、忝けなしと天明を喜ひ此虎嘯館を立出て、急ぎ虎隣館に歸りたり。

ホット一息

二十五日

二十五日空打ち曇る、夜來の苦惱に心身いたく疲勞を覺ゆれば、虎隣館に歸りて暫し枕を引き寄せて自由に手足を延はしたり、一睡して目を開けば既に午後一時に垂んとす、鉛質に出てんには最早時刻遅れたり、氣力も未だ全然回復せず、滄莫、可惜半日を無下に過ぐ行んも本意ならず、今より住吉の社に詣て、その廣前にひれ伏して心地をも清々しくせんものと、難波の停車場に至り、上等切符を買

シヤモ大工の  
上等切符

ひて瀛車に乗る、車中予の外に一客なし、鐵道の役人五月蠅ほど來りて予を睨む、其口角を鋭くとくせるところ何となく小言いひ度き様子見ゆ、是れ蓋しシヤモ大工の上等客は勤儉なる坂堺人種中に多く見ざる所なればならん、只た此大工風体にも似す途中て買ひし四角文字の關西新報など手にしたるに由り、一瞥あるものと察せしにや終に一言も差向けられず、我友脇枕子青天翁などか嘗て脚半に甲掛臂の笠にて新橋停車場に陳蔡の厄に會ひし其活劇を再演するに至らざりしは幸なりき、既にして住一日間の住吉 吉に達したり、乃て青松白砂の中に長しなへに宮居して津の國の一の宮と仰きまつる御社の一の宮二の宮三の宮に詣願つけは不思議や六根何となく淨爽なるを覺えたり、此を伏し拜むにつけても、津守有基か「住吉と思ひし宿は荒れにけり神のしるしを待つとせしまに」と詠めたるも、新古今のはしかきは「奉幣使に住吉に參りて昔し住みけるとまりの荒れたりけるをよみ侍りける」などあれど其實は此歌讀も名護町か今宮邊の路次に住まぬ、歌のみよみて徒らに天祐を待ちつゝ貧乏したる連中には非すやなど、理窟もなき事考へつゝ、け乃て虎隣館に歸りたり。

二十六日

二十六日空霽れたり、是れより先き鉛屋となり屢々名護町、今宮、木津、難波、西濱に出入し、事情の一斑は探り得たり、去れと予が初めより最も精しく探らんと志せしは名護町なれば、鉛屋的探檢は範圍過大に失し、調へ鹿にして密ならず、語て精しからざるの患あり、尙他に名策ある可き歟と探檢顧問なる吉田に請れば、吉田笑て貴殿の様子餘程調子善くありたり、去らは今回は名護屋町の中の裏長屋を

大我又た屑屋  
と爲る

のみを相手にする屑屋に周旋すへしとて、乃て予を伴ひて一の老屑屋に紹介す、此屑屋は一の荷車上に一大籠を載せ之をは到る處表の路次口に曳据え置き、別に手ころの籠を肩にして路次へを廻り、得たる處を元の大籠に移しては又其次へと廻るなり、予は乃ち此老屑屋と同一なる籠を負ひ泥々行を始めたり、職業よりいへば屑屋より一等品格悪ろしと雖も、鉛箱擔く苦しみには比すれば其難易霄壤なり、斯くて午前九時よりして午後二時過ぐる頃ほひまで、二百二十餘箇處の路次を廻り、五百餘軒の長家を見舞ひたり、而かく數多の路次を廻り、而かく數多の長屋を訪ひて幾何の商買を爲せしやといへば、襪履、紙屑、鐵片等にて買出したるところ金高僅に十錢五厘に過ぎず、去れと繼屑屑は百目七厘、紙屑は六厘の相場なるより十錢五厘の買入品を見れば其嵩實に十六貫目の巨額に上る可し、驚き入りたる商買なり。

二十七日

二十七日も昨日の如く屑屋に隨ひて終日三丁目以南五丁目に至る名護町の饑寒窟中を探り、得るところ實に渺からず。

二十八日

二十八日、二十九日の兩日は虎列刺瀕死の餘弊にや心地も腹も常ならされは虎隣館に打臥したり。

三十日

三十日探檢未だ盡きされど、先つ名護町の概念は居士の腦裏に出来たれば、歸京せばやと思ひ立ち、西來以後十五日めて鬚を剃り浴を取り、絆纏股引を脱却して常の衣服に改たむれば流落の大工、新鉛屋今參の屑買も今は一個の士人となれり、予は此十有五日の間は未だ一日も褌浴衣、襦袢縹を脱きたる

十一月一日大坂  
出立歸途に就  
民一朝にして  
土人さるる

ことなく、是をもて道頓堀千日前の道邊にも、難波名城の見物にも、天満天神、四天王寺、乃至は生玉住吉の參詣にも、路傍一車夫の乗車をど勸むる者にも會はざりしか、今日洋服して寓を出つは、未れた一町ならざるに腰を屈め辭を卑うし、呼ふには旦那を以てして召しませといふ人力車夫二三にして止まらず、夫の有福の長者を戒めし諷世翁の警語穿てる哉と獨り心に感嘆し、乃て勸むるまに一車に乗り、辱知の諸氏を歴訪し、所見を質しいとまを告げたり。

十月一日大坂  
出立歸途に就

茨木の停車場近くなる頃より車中に小兒の啼聲烈く起りたり、兎みれば二歳許りの頭是なき兒の髪々しき七十以上の老人に抱れたるか乳を求めて叫ぶなり、予は憫悞の情心に充ち、何れまで乗らるゝにやと尋ぬれば、美濃の國なる大垣まで乗り行く者なりといふ、梅田より大垣までの間には二十餘の停車場を経ることゆへ、午後五時ならては下車すること叶ふまじ扱も痛はしき御事やといへば、車中の乗客は之を聞き、中には年寄の分際にて赤子を抱きて乗り來るとは不所存なり、台客の迷惑此上なし是等は鐵道局にても何とか規定するを考へてもらひ度しなど咳く當世風の紳士もあり、老人は涙を垂れて衆に向ひ、是れなるは實は我孫にて候ふか、此兒の父は此たび大阪にて虎列刺に罹りて没し、續いて此兒の母も亦其の毒に感染しアレ御覽せよ彼處に居候ふ十一の子を始めとし此二つなる嬰兒まで四人を残して一昨々日みまかりて候ふ去れば他に頼るべき術もなく今此爺か在此處なる大垣にまで連

無情有様一車  
中

れ行く處にて候ふ、何を申すにも頭是なき兒にて方々の御迷惑畏入り候へど曲けて免させ玉へと打ち詫ひたり、其間にも小兒の啼聲は止まらず、是に於てか人々始めて汝の天良を動かかし來り、不愍の者よ、薄命の子よとて共々に心配し出てたれど、乳ある人なければ詮方なし、此時三十五六の奇麗に裝ひたる一婦人ありしか、今ま一車中人々の心配しつゝあるにも係はらず疎知らぬ顔して窓外に頭を出して之に取合はす、人々は聞えよかしの斯かる時には乳汁の有無は暫らく措き、乳房を含ますのみにて啼き止むるものなるにといへど更に應せず、多分所謂紳士紳商の細君か權妻かならん、人々多く乗り合はずは鐵拳の一つくらゐは御心得の爲めに其横面に進せんものと思ひつゝくる中、高槻より三十前後の婦人ふたり乗る、此の婦人は老人の膝上に啼き入る小兒を見るより早く、此方に暫し御よこしなされどてかたみ交りに抱き上げて乳房を與ふれば啼聲は頓に止み、後は小兒悅びて笑顔を作れり嗟彼れと是れとは玉石の差なり、斯くて玉石一車に盛りたる瀛車は京都に着きたれば、車を驅て京都の名所舊跡を匆匆に一覽したる後ち一棧に憩ひ其夜の瀛車に再たひ駕したり。

二日歸京

二日無事に東京に達し、先づ我「日本」の編輯局に入れば諸友欣々笑容を開きて予を迎へらる、予も何となく心うれしく、恰も大戦の中より出て、凱旋したるの思ひをなせり。  
大我居士か鐵寒窟の探検中、虎隣窟に寓し、虎窟に宿し、飴賣とあり、屑賣となり、漂泊者と見せ、大工に扮して、日に身接せしところ、目撃せしところの一斑は、かつし之を記したり、去れど是れは局



饑寒窟の大跡

は戦略の眼一世に高き將軍と雖とも亦難んする所なる可し、仍て此回より四五回に探検中に得たりし概念を擧て其の大體を現はす可し、此の大體を現はすに就き先づ此に特筆す可きものは則ち

饑寒の全窟

なり、再言すれば日本橋筋三丁目より五丁目の端、今宮との境界なる名護橋に至る所謂名護町路次裏長屋の状況なり、此の裏長屋とは名護町三丁目の通路を挟む表屋の背面に開くところの一區にて予は未だ其長屋の精確なる統計を得されは此に其戸數幾何と明言すること能はされど、嘗て僅に一日の飴賣行に於てすら一百餘の路次へ出入し五百餘戸の長屋を數へたり、去れば實際の戸數に至りては中々此に止まらず、斯くの如きは東京の貧天地間新網にても下谷にても絶えて無き所にて、誠にはや海内無双の饑寒窟にやあらんすらん、抑此裏長屋なる無数の小國に入り込む通路には一の闇黒的隧道あり是れ即ち彼等の爲めには必由沿行の一等道路なり、此の隧道は日本橋筋に所したる各表屋の左右一側を仕切り、其幅は五尺よりも廣からず、其長さは表屋の奥行に隨ひ大抵七八間に涉り、上は軒より差出てたる屋根にて蔽ひ、左右は甲屋と乙屋の壁か板圍か聳立し、白晝にても日光透らされは、夜は闇黒にして咫尺も辨せず、此隧道に探り入れは道の間には吉田屋裏、濱野家浦など表屋の姓氏を表したる掛行燈あり、尙ほ是れ田家里、李家莊など稱するもの、類ひならんか、裏と稱するは洞裏の

饑寒窟の一等  
道路は闇黒な  
る隘路なり

共用場

此處衛生談入  
る可らず

地蔵堂

一年の大盛衰

裏とするも浦と記するは海浦の浦にもありし、學者は却て之を解し得されど、土人は皆ウラの意味たるを知れり、夫の瀛車の隧道には石炭の焼けたる異臭を留めたる如く、此路次の隧道に入れば亦一種言ふ可からざる惡臭あり、此の隧道を經過すれば彼れ等の共用場及び共用物あるの地に達す、此にも長屋共用の井戸一ヶ所、共用の總雪隠二三所、同じく共用の大塵芥所亦一ヶ所、咫尺の間に隣を比し面を對して竝ひたり、其卑穢にして汚臭ある一見して「此處衛生談容る可からず」といふ不文憲法の行はるゝ邦國なるを知らしめたり、夫のジョイナーチとやらんか英國の狂暴なる貧民か住居のあたりを評し暗き小路に於て半片の煉化石は外人を利する爲め備へられたるものなりといひし語は斯かる場所をやいふならんぞ想像せしむ、去りながら其間に於て一箇可憐の心情を惹き起さしむるものは地蔵尊を祀りたる小堂宇なり、無数の長屋中には塵芥所なき處は往々これあり、去れど何れに到り見るも地蔵尊を安置せざる處なし、蓋し地蔵尊は慈悲を主とし恩恵を知らず佛なればとて彼等は深く渴仰し、其屋賃の日掛け一錢の義務の爲めには溢りに溢るにも係はらず日に一厘乃至は二厘の錢を喜捨し、其淨財は表屋に預けて善積し、毎年七月二十三四の兩日をもて大祭を催し、此に一大盛衰を張りて兩日の飲をなし、一は一歳中の困苦を慰り、一は現世と未來とに於て此佛の私誓の松に乗らしめ玉へと請ひのみ奉るものならん、彼の英國の一記者が著はせし英京の饑寒窟探検記を讀みしに貧民の狂暴狂暴なる、彼等の言行中に於て如何に求むるも十字架の十字の字すらも動くを見ず、然るに此の貧民を見れば

現在未來の功徳を積む殊勝可憐の心あり、此心こそ世界無比なる日本人の心なれ、以上隧道より廣場を過ぐれば長屋の路次と長屋出づ、路次は則ち長屋と長屋との谷にして廣きは六尺に及び、狭きは身を横にせされは通過し得ず、此路次の便利なる、長屋と街道との接線となり、長屋と長屋との公路となり、長屋一帯の物干場となり、餓鬼等か遊ぶ運動場となり、時として長屋會議の大會場ともなることあり、其長屋は少あきも五六軒、多きは十有軒聯接し、一直線に數棟の軒を比へて隣れるもあれば路次を挟みて對向するもあり、又其長屋の構造は一面にのみ口を開きたる片面長屋あり又家の中央より兩邊に葺下し中央に一線の壁を通し兩面に口を開きたる兩面長屋なるもあり、故に此兩面長屋の中ほどに住すれば薄き一の土壁を隔て、左右を後ろ三方は皆な隣國と接すべし、若し予か曾て「貧天地」に數多の矮屋連接したる長屋を稱して、リ、ゴンを聯ねし、瀛車の如しと譬へし辭を再引して是等の長屋を形容するを得は、短かきは坂堺鐵道の列車の如く、長きは東北鐵道の列車に似、最も長きは東海道線の夜瀛車に比す可し、尙ほいは、其長屋の一線なるは進行中の瀛車の如く、對向なるは上りと下りの瀛車の相遇へるものに似たり、扱其の一軒の廣さを見れば各戸一軒一室にて、四疊敷くらゐを上等とし、三疊くらゐは其次とし、最も下等に至ては二疊を以て一軒となせり、此一室一屋の住居こそ彼等の寢所となり、食堂となり、病室となり、産所となり、工作場となり、俱樂部となるの家屋なれ。

長屋は列車の如し

一軒の廣さ

大小の長屋は大小の聯接瀛車に異ならず、此瀛車の長屋に觀じ、風雅でも無く洒落でも無く、枯燥無

屋

味なる沙漠的世路の長士旅行を爲す旅客の状況如何を見よ、彼等一たび此世路の名護町發車場に入り乗合旅客の一人となれば、其前程は遙々萬里、恰も外人に貸與したる積積居留地の如く、不動産の如く無期限永遠の約束にて、中途に之を移換すること難く、心ならずも止むを得ず、其日々と送られ行くなり、彼等の借受けたる四疊三疊或は二疊なる一室一室の屋賃としては表屋に向ひ一日に二錢五厘より一錢二厘までを日掛として納むるの掟あり、從來は之より廉にして一錢二厘の一軒は只の七厘に過ぎざりしも、彼等の困しむ物價騰貴の四字は却て屋主に口實を與へ、忽ち七厘以上の直上げとなり、去れと權利者と義務者の悲しき、不平を訴ふれば否ならよせといはるのみ、之を如何ともす可きなし、且つ其掟の嚴酷なる、一日日掛を怠れば容赦なく猶豫なく屋主の名代此に臨み居て店立の令を執行す、其中執行を拒む者あれば強力にして頑固なる名代人は立ちかゝり病者にもあれ、寡婦にもあれ、手を執て内より曳出し、長屋以外三里とはいはされど、直ちに此地を退去せしむるなり。

退去執行

彼等一日已に瀛車の長屋より追放せらるれば、其夜より忽ち天涯無宿の人となる、此に所謂無宿とは上州無宿、甲州無宿杯の類なる亡命者を言ひ現はす比喩にはあらず、文字固有のヤドナンなり、大阪の語に之を稱してマチンホとは名づくるなり、マチンとはマチの音便、即ち雨露下驟立の意にして、ホとはハンボ、ケチンボの音なり、譯して而して之を書けは立的坊とは云ふなりと翻言學者はいふか動だか、扱此の立的坊昨夜二百八に下らずとは驚くべき大數に非ずや、坊の坊たる原因は何よりし

立坊

て来るやと探れば、或は其日の所得多くして日掛を拂ふの剩餘なきに由るもあり、或は之を拂ふだけの剩餘を得ざりしには非ざるも他に使用せしに由るもあり、中には初より拂ふの意なく所得もて飲食の慾を飽かせ露下の立的坊たるを甘んずるに由るもあり、當局者にても之か處分に種々の考案を費せしも是れそといふ名案もなく朝四暮三の取締法をして僅に之を處するのみ、即ち立的坊徒は一々之か吟味を遂げ、中にて随意の立的坊たる真正の情民は之を捕へ、巡查附添の管轄外に驅り出すなり、例へば南區の警察署は其區の立的坊を捕へ西成其他に驅り出せば、西成其他の警察署も亦其次へと驅り出すなり、去れば彼等は西に追はれ東に驅られ南に奔り北に逃げ、流石平氣の立的坊も立的の地に困するより、已むを得ずして自動の途に就くもの漸く出て来る、此政策當りしにや近頃頗る立的の數を減したりと其筋の人は語られたり、思ふに是れも一法ならん、去れど南區は朝次に西成に驅り出せば西成は暮に南區に追返す、往年群馬新編の兩縣か毛越の縣界にて日に巧食の交換を行ひたるを見しことありしか、今を見る所は是よりも更に一層甚しといふ可し、是等を名けて朝三暮四の取締法ともいふ可きか、但し警察署相互の間に就て見れば朝次に四回之を追ふより暮に三回驅出す方宜かに其夜其區の安全を保し得るの利益ありしは、朝四のものより暮三の方警察の手際は勝る可し、扱は朝四暮三の法といふ方寧しろ適當ならん。

予は初め疑ひたり、東京の貧民窟には到る處木賃安泊なきは無し、然るに窟に来て見れば其數實に夥

#### 安泊なき理由

窺にて特に有名なる名護町に安泊なき理由更らに分らすと心を注め居しが、長屋の事情を一探するに及びて疑問は忽ち氷釋したり、夫の驅車的長屋の日掛は嚴ならざるに非ざるも、日掛の控に隨ひて一日一錢二厘を拂へば堂々として一戸の主人たる便利あり、且此長屋に最大の便利は釜手桶の器具よりして夏は一張の蚊帳を貸し、冬は一枚の蒲團を貸すの特例あり、故に身に一物一品を有せざるも一たひ此に投すれば一の安樂なる城郭を得へく、其城郭は好しや二疊の廣袤に過ぎざるも、彼の大枚二錢の屋根代を投して僅に一尺八寸の寢床を授けらるゝに比すれば、得失勞逸日を同して贈る可からず、土地に安泊木賃のなきも固より其處なり、是に就ても名護町饑寒窟の由來するところ遠くして新網下谷の比例す可きに非ざることを知るに足れり。

#### 個人的小便所

夫の隧道、共用場、路次、長屋等の有權に次ぎ今ま一の數ふ可きあり、彼等か戸々の入口には大抵個人的小便所の設けあり、蓋し大坂の習慣に於て共用の總雪隠に於ける利益は表屋の所得に屬すれど、小便は其外なり、此小便を直接に農家と賣買の約定を結へば、一人に就き十錢の年、金を受くるの特權あるものなり、然るに表屋は成るだけ其の建設せる總雪隠を使用せしめ、彼等と農家とを間接の關係となさんとす、此言に隨ひ其總雪隠に小便を托すれば表屋は常に七錢を食りて彼等には唯だ僅か三錢より渡さず、彼等の便糞論者風に之を償償して干渉の宿弊を掃斥し、遂に個人的小便所を其戸々の軒下に設置することを得るに至りしといふ、是を以て長屋の一番は更に一層の惡臭を溢えたり。

予饑寒窮の裏に遊び、日に路次長屋の間に出入し、實に其戸數と人口との夥多なるに驚くあり、因て其戸數と人口との如何、其住者の常住民たるか漂泊民たるかの如何、其漂泊民か濫腸せる泉源の如何男子と女子と生々の如何、出產と死亡と比例の如何を討窮し此の人種は果してアイノ土人の如く、亞米利加土靈の如く、或ひは布哇國人の如く、年々消滅し行くものなるや、將だ全體の蒙古人種の如く、チウトン人種の如く歳々増殖し來るものなるやを明らかめんと欲し、統計に就きて頗る得るところあり、今日本橋筋三丁目四丁目五丁目なる各護町の戸口は本年七月の調査に據るに實に左の如き多數を示せり

戸數		人口	
裏屋	表屋	裏屋	表屋
二、四五〇戸	五九二戸	七、六〇〇人	二、三八八人
合計	三、〇四二戸	合計	九、九八八人

即ち戸數は三千餘戸、若し中昔の朝政時代か封建世紀に於てせば三千餘戸侯は不次の寵錫、一侯國を爲すに足り、又其人口は先づ一萬、布哇王國七分の一なり、誰か知らん日本第二の大都中央に布哇王國七分の一なる一侯國あらんとは、此裏屋と表屋に就き人口の比例を観るときは、表屋の戸は平均四人、裏屋の戸は平均三人強の割合にて裏屋は却て表屋より家族少人數を示せども、事の實際は

何處の裏屋も噴咽するほど住民あり、扱は朝集暮散の民にて調査以外に立てる者此外に多く存するに由る歟、此一萬の貴侯國住民は常住民と移住民との二種より成れり、之を譬へば常住民は内國人の如く、移住民は外國人の如く、常住民は本來の國民に似、移住民は歸化の人民に似たり、近來此内附の歸化の移住の民種は日に月に多きを加へ今殆ど本來の國民の十分一に居るに至れり、此侯國國權の隆盛なることは、如何なる移住民と雖も一たひ此國に入込りば、長屋の交際法、掃除番の規則、地盤祭の掛金に至るまで一切國法を遵奉せしめ決して治外法權を與へず、然れども又北國民の寛宥大度なる如何なる移住民も國法を奉すれば内地雜居の自由を與へ、小便代收入の權利を有せしめ、長屋の會議にも地盤の祭場にも同等に列席するの權利を保たしめ、毫も彼是を輕重せず、但た此一事の因りたる患害は古の穢多今の新平民なる西濱人種が内地雜居の便なるに乘じ、續々此に移來して四丁目以南に其住居を占め、彼等か代々承け傳へし弊惡、頑愚、貪慾、卑陋、汚穢の風俗を以て貴侯國の習慣制度を廢毀敗類せしめ行くなり、是を以て侯國人は「一般に彼等を」西の人」と稱し、深く忌嫌し憤懣し居るも亦之を如何とせずする能はず、此狀態は早晚一度必ず日本帝國の上座に於ても現出す可、弊惡、頑愚、貪慾、卑陋、汚穢なる所謂「西の人」となる者豈西濱の新平のみならずや、茲に明治十九年より二十二年に至る四年間の重なる移住民の數を列擧すれば山城、大和、河内、和泉、攝津、紀伊の六州よりして集まる者實に左の如き多數に上れりや

治外法權と内地雜居

四の人

移住民の數

男女の數	表屋男	裏屋男	男女の數		
			表屋男	裏屋女	合計
西區	四八	二〇	二〇	三一	四七
南區	一一〇	一〇〇	一〇〇	一五一	一四八
北區	一一一	二〇	二〇	三七	二二
各郡	二〇四	二二八	二二八	三四五	一七一
和泉	二三四	一〇二	一〇二	一六五	一四一
河内	一六四	五〇	五〇	一一六	一三一
異庫	一四八	四三	四三	九〇	五三
京都	六三	四〇	四〇	四八	三三
和歌山	一八六	二九	二九	八三	八一
奈良	二六八	二二	二二	八八	八三
合計	一,二三七	三,七〇九	三,七〇九	一,一五一	三,八九一

古より大坂は稱して、近畿の富の中心といふ、今此表もて觀るときは名護町は亦近畿の貧の中央なる歟  
 去らば此貧國の男女の數は如何にといふに表屋と裏屋とを通し

合 計 四、九四六 合 計 五、〇四二  
 東京の貧天地に女多く、大阪の窮世界も亦女多し、扱は「貧天地」に於ける男女少女夥の見幾きと見えたり、此に一の驚く可きは出産及び死亡の數なり、一尤ひ此對照を看るときは未來の名護町腦裏に現はる可し、其數は

項目	出生自二十二年一月至同十二月	死亡自二十二年一月至同十二月
日本橋筋三丁目	七六	一〇三
同 四丁目	九〇	一八四
同 五丁目	六五	一〇五
合計	二三一	四九二

即ち昨二十二年中死亡の出生に超過すると二百六十一人の多きあり、此一年間の死亡者を此一年間の出生者もて補充せんと欲すれば、之に二年を要す可し、左らば二年間死亡者の補充は更に四年を要す可し、此割合にて進み行かば、現時人口一萬の貧侯國は、彼の移住民の常に來りて死亡の代償となる微りせば、今より三十八年の後と明治六十一年の秋に至り、侯國の人盡く滅没し、哀れ秋原頭は名護橋一片の懸石を留むるのみに至らんのみ。  
 扱我日本人種の全体は驚く可きの割合を以て年々に繁衍繁殖し行くなるに、如何なれば其中の貧侯國

## 死亡の源因

食物の欠乏粗  
悪時刻不定

のみ獨り死者の數生者に超過し行くやらんと心に繋り此頃疾のつれづれに予と同情なるオッテン、P  
 ツンザイルとなんいふ人の物せし「巴里の孤兒」といふ書を読みしに、同じ思ひに是等の理由を深く  
 探討して論じたり、お蔭にて得たり此の貧侯國の死亡の源因は、第一食の缺乏なり彼等は顔面ならざ  
 るも屢々空して胃囊を飢やす、今ま一層適切にいへば空しきか常に食すると屢々あるのみ、是れ  
 即ち一因なり。次には食物の粗惡なるなり、貧郭播間祭餘の肉など時に榮養物を取ること無きにあ  
 らざれど、それは固より希有の事、其常食は鮭飯鰻魚、否らざるも雜糧糲粉、何れも消化器に取りては  
 濟度し兼ねる難物のみ、次には飲食の時刻無定なるなり、彼れ食なければ聖人の如く終日食はず終夜  
 寝ねず、會々之にあり付けは朝夕晝夜の別なく一飽を食り、一飽すれば其儘其處に一眠する杯は常の  
 事なり、斯くして如何に衛生談と兩立す可き。次には薄衣を纏ふなり、雪花翻々たる冬の空彼等は  
 着の襤褸の然も全体をは掩はぬを着け、霜威凜々たる寒の宵、彼等は一枚の煎餅蒲團も被らざるもの  
 多きに居れり、次には襪衣を履するなり、垢は留て寸積し、膏は凝て塊結し、虱は巢くひて子孫を増  
 殖し、蚤は潜みて同類を孵化す、洗はんと欲すれば裸体を如何せん、改めんと欲すれば更衣なし、寝  
 るも是れ、起きても是れ、出づるも是れ、入るも是れ、春夏秋冬皆是れなり、是れ此一衣は常に其身  
 を掩護するも、又絶えず其身を侵害しつゝあり。次には住居の衛生を害するなり、入口一つ窓一つ塵  
 井便所と隣をなし、汚濁の毒空氣は怨靈の怨家に附き繞ふか如く、常に彼の室中に在りて千萬回其鼻

## 住居の汚穢

## 薄衣と襪衣

## 疾病を治療す

孔吻口より出入し、彼等の肺管を攻撃せり、其次には疾病を治療し得ざるなり、彼等は一たび疾病  
 に罹れば又ど無き貴重之の身体を疾病の禍神に犠として供し奉り、神の思召に隨ふの外なきなり、禍  
 神幸に深く崇り玉はされは是れ勿希の幸のみ、若し嚴しく禍すれば謹て命を獻るのみ、願れば他の社  
 界に於ては良し禍神取りつくも治療の天使を呼び來りて穢に追やらへば、取殺さんと欲する神も志  
 を得ずして立ち去れど、此一窟には哀れにも天使を呼ばんすべ無くて、神の意に任するまゝ、死ぬ可  
 からざる病因も致命の元となるか比々なり、以上の諸因、此に一われは生を害ひ壽を縮むるに足るも  
 のなるに、諸因を合せて悉く有するを見れば貧侯國の死生の割合、帝國人種全体の繁栄盛衰し行くに  
 似ざるも亦怪しむに足らざるなり、再思すれば生來無病息災なる大我居士か歸京以來兎角勝れず、終  
 には此一週の間筆硯を廢するに至りしも亦此數因の其の一二を侯國より得來りしに基つけり、僅々二  
 週餘日の探檢者さへ既に斯くの如くなれば、全般の事情を推測するに於て讀者諸君の判断亦た自から  
 容易ならん。

貧侯國は地獄かも、饑寒窟は那落かも、一たび名護町に其居を下すれば彼等の社會は之を墮ちて來た  
 といふ、其意を察すれば蓋し二あり、一には上層の社會より此下層の社會に墮落し來たるを意味し、二  
 には下層の谷底に墮陥し來り容易に再び此地獄貧窟を脱出し難きをいひ顯はせるものに似たり、此  
 墮落一萬の民は何を憂むところありて此かる廣大なる一侯國を保ち得る歟、粗漏なれども當局者に因

て調査せられたる職業の種類あり、今ま此類別を左に掲げ貧國民種の状況を讀者に概見せしむ可し、即ち

種別	雜業	無業	紙屑拾	乞食	燐寸職
人員	六三〇二	一一一	一五六九	一〇〇六	九九〇
内男	三四六〇	四九	七二九	五〇二	一九八
女	二八四二	七二	八四〇	五〇四	七九二

是に據れば乞食と燐寸造とは各々十分の一に居り、紙屑拾は十分の一と半を占め、無業は僅に百分の一強なるのみなり、去れど乞食は固と職業に非ず、然るを乞食の外に無業といふは随分可笑しき類別の爲方なれど、無業とは食するわざを知らず東西に彷徨する眞の國民を指したるものと見ゆ、人生誰も生を愛まぬ者はなし、只其生を愛めはこそ此に墮ち來りても死を免かるゝの方便は求むるなれ、去れば其の所謂無業者の少なきは亦怪しむに足らず、其最も多くして殆ど侯國十分の六以上の人口を占めたるものは雜業なり、然れども此類別は全體家を以てせずして人を以てし侯國一萬の人口を一切類別の内に入れたるものなれば此雜業人種とせし者の一半は兒童と見做して誤らじ、扱は此貧侯國は燐寸造一分、乞食一分、屑拾一分半、無業一厘餘、雜業者三分餘、兒童三分餘より織り成されたるも生活の一適例のと知られたり、此に其の生活の一適例とし顯はす可き話あり、一日予名護町の一角涼車的長屋の前に

住する某の家に赴き、其對面なる長屋中の一戸を窺ふに、廣さ四疊半なる一室の入口には二十四五許りの男種一條着けしのみなるが泥足の儘にて仰臥し居れり此は其家の悴にて常職なく市中の雪隠掃除又は虎列刺の男夫となることも聞々ある者なりといふ、薄闇き方には七十許りの老婆燐寸の箒を貼り居けるか四歳許りと見ゆる孫兒か箱に唾を吐き掛けたりとて婆は其孫を攫み、非道にも拳骨二つ三つ其天頭に喫はせたり、左なきたに痛む痛瘡天頭を打たれたれば孫は手足を震はして泣き叫ぶ、其側には此家の主婦と見ゆるか久しく瘡に侵されたれば爲す手業さへ出來ず、加て、當歳の乳兒さへあり、之を抱きて壁に向ひて敷物もなき破疊の上に打臥し居れり、尙ほ流し口には十五と十二許りなる姉妹の小女か腰打ち懸け、姉は三絃を袂の上より握り、妹は破扇を手にして柱に據り、姉は難波薪地に赴かんとといへば、妹は島の内に限るといひ、頻りに向ふ所を争ひ居たり、予は覺えず扱も多勢なる人數哉といへば、某は例より尙ほ此に留まらず、彼の子等の父なるは紙屑拾にて今朝も早くより出掛け、祖父なる乞食は彼岸を當て込み天王寺に赴きて今は其留守中なり、其他に同居の男常に一二人は絶えずといふうち、石炭酸の香を紛々と先きたて、歸り來れる男あり、あれか即ち同居人なりと語る、既にして階次口の方にて管竹キリと振り鳴らしア、何ても飴と取り易えやうと一聲高く叫ひつゝ此方に進み來るあり、頓て對面の家に入る亦た是れまて同居人なりといふ、嗟此驚く可き光景こそ彼の一窟の當惑なれ

歐洲の社會にては常に喧しき問題の一は勞働時間の長短と、之に應ず可き賃銀の多寡との比例に在り  
 社會黨は何時をも是を以て富者攻撃の材料とし、職工の徒は動もすれば是を以て同盟脅迫の一素因と  
 なせり予亦我國下等社會の勞力と賃銀との割合に就き久しく心を注むる所あり、故に此窟に遊びても  
 朝々早起して窟民就業の遲速を觀、宵々歴遊して窟民終業の早晚を察し、略は得たる所あり、乃ち虎  
 隣窟滯留中實驗に徴して左の如き一表を製したり、

業 務	就 業 時 間	勞 働 時 間	勞 力 高	賃 銀
草履裏付	自午前六時至午後六時	十二時間	二十足	金 八 錢
人力挽	自午前六時至午後十時	十六時間	.....	金 十 八 錢
燐寸詰	自午前六時至午後六時	十二時間	二十枚	金 八 錢
燐寸箱	自午前六時至午後六時	十二時間	七百五十ヶ	金 三 錢 五 厘
車 力	自午前六時至午後六時	十二時間	.....	金 十 八 錢
磨砂賣	自午前八時至午後六時	十時間	五 升	金 二 錢 五 厘
按 摩	自午前六時至午後一時	七時間	五 回	金 五 錢
紙屑拾	自午前六時至午後六時	十二時間	七百五十目	金 四 錢 五 厘
乞 食	自午前九時至午後五時	八時間	三百軒	金 三 錢

らほすげ	自午前七時至午後六時	十一時間	六 本	金 四 錢
藝 人	自午前七時至午後五時	八時間	三百軒	金 五 錢
平 均		凡十一時間		金七錢一厘強

面白くもなければ此表に據れば彼等か日々執れる所の勞力と、之より得來る賃金とは自ら瞭々たら  
 ん、是に就き讀者の注意を請はん爲め、聊か説明を下す可し、  
 第一、草履の裏付、は三色の糸もて草履底に麻裏を綴ち着くるなり、其手を要する容易に非ず、熟練の  
 手をもて十二時間を費すも二十足内外を製するに過ぎず、若し素人ならましかば、十五足も六ヶ敷し  
 而るに其賃金を問へば大人物一足の裏着僅々四厘に過ぎずといふ、終日もて八錢を得んことは實に難  
 事なり。

第二、人力挽、は賤業中の最も有利なるものとは下等社會一般の信するところ、此窟に於ても此業は賃  
 金の割合甚た高く、一日十八錢くらぬは得るといふ、是れも彼等の自白なれば當てにはならず、眞し  
 十八錢を得るとても、其中より車の損料を差引かば實際は十五六錢の所得ならん、而して其車はと問  
 へは何れも低き、割けたる、厭やな二人乗車なるに、加へて挽夫の多くは皆飄流的ひまわり人なれば、体面と  
 迅速とを要し價を問はざる乘客には固より有りつくこと絶えて無し。  
 第三、燐寸詰、とは燐寸箱に燐寸を詰めて賃銀を受くる職業なり、二百二十の小箱の裏に之を詰りたる



を一枚といふ、一枚の詰手間は四厘と覺えたり、去れば一日八錢の賃銀を得んには二十四萬本の寸を二千四百の箱裏に充たさる可からず。

第四、燐寸箱造 燐寸箱一箇とは身と蓋との總稱なれば七百五十の箱を造るには千五百箇を貼らねはならず、下手な貼方をなす時は七百五十の箱を造るに七厘の糊を要すといふ、斯は自辨に属すれば之か賃銀三錢五厘より七厘は早く差引かる可し。

第五、車力 も亦此社會には有利なる業の一つなり、道頓堀の邊りより住吉まで凡そ一里か其間を、牛馬の如く重荷を挽けば四錢或は六錢を得へし、十八錢を得る爲めには四回以上の往復を要す可し、十二三より十五六の小曹に至りては辨當持參にて一日に三錢を與へらるのみ。

第六、磨砂賣 磨砂は需用の數量極少なれば日に五升より多くは賣れず、一升よりして得る所は五厘の利益に過ぎざるなり、去は一日の稼高二錢五厘の外に出ず。

第七、按摩 土地の衰しに此に限り按摩上下百文か定價なり、去れば七時間に七回揉めは、七錢を得る等なれど、頼まぬ肩より賃銀も出でず、五錢を越すことは六ヶ敷し。

第八、紙屑拾 は競争者最も多き職業の一にて、此地のみにて一千五百餘人あり、斯かれは八百ヤルドの競争の積りにて最初より先きに〜と魚かざる可からず、而して一生懸命に終日働きたる其結果、七百五十目の拾高より百目六厘即ち四錢五厘を得へし。

第九、乞食 乞食の職業とは可笑しき事の極みなり、去れど此にはお乞食と稱し、立派なる職業の一なれば、隨て其所得を算するに、一日八時間三百軒を歴巡る中、十軒の一軒か一厘の手の中を出すと假定して先づ三錢なり、予か鉛賣行の經歷より推すに三錢くらぬの所得はあらん。

第十、はすげ 彼等社會の常習として何れの職業も油断ならねど、別けて此のらはずげ換はずげ換を頼まれたる其煙管、らほ代に勝ると見る時は、忽ち其儘持逃げするか多ければ、市中を歩りくも依頼者少なく、隨て六本くらぬか先づ上等の出来榮なり。

第十一、藝人 此に所謂藝人とは唯口か手か目か鼻かを藝人的に動かすものにて所謂學者の學士に同じ但し此藝人は乞食に比すれば多少の人望あるをもて所得に二錢を加へたり。

其他、溜圍掃除、屑屋、鉛屋、轆轤師、傘の骨削、日履、車の先推、草履の裏繩及棕櫚繩振り、空樽買、等枚舉に違あらず、其種類の詳細は「貧天地」の職業字彙に就て見る可し、其他に唯た此字彙に漏れる一種新奇の爲事あるを發見せしはガタロなり、ガタロとは河太郎の略約即ち河童の意味と知らる、此ガタロは市街の檐端近き河川溝渠の中に其身を埋め水底泥裏の土砂を掬し上げ其中より筭、火箸、剪刀、庖刀などの類を天運的に探り出す者なり、此業固より其利益を天運に期する爲事なれば、在る日もあり無き日もあり、然れども時に珊瑚の五分玉を掘出し、時に黄金の指環を探し得たる者ありといふより彼れ等の冒險者の往々喜て就く業とはなれり。

以上列擧せし十一業一日労働の時間を總計すればは二百二十時間にして、其實銀は七十九錢五厘なり、去れは平均一日一人の労働時刻は凡そ十一時間にして、賃銀は七錢一厘強に過ぎず、其七錢一厘強たるも十八錢の賃銀を得る車夫と車力とを加ふるに蔭なり、若し此二つの者を除き、他の九業を平均すれば、一人の所得は四錢八厘餘たるのみ、流汗滴々日下に立ち、手足胼胝寒天に働き、一日の得るところ僅に四錢八厘を出てす、貧侯國の女按摩一日唱然として予に謂て云く金持の目より觀なば貧乏人はと阿房らしき者あらじと、予之を聽て轉た悽惻の情に堪えず。

一日一人の生計費

彼等の職業、労働時間、及び所得賃銀に次ぎて觀察す可きは彼等一日一人の生計費の高に在り、彼等は平均一日四錢八厘餘の賃銀を得るのみなり、而して其生計費に要する所を精査すれば

飯米 四合 (一升七錢)	二、八	薪	〇、三
飲料水(手桶八目分)	〇、二	屋賃 日掛	一、五
菜	〇、三	地藏祭の積金	〇、二
合計	五、三		

以上は彼等か僅に是れ雨露を避けて一生を繋ぐ爲めのみの費用なり、是れ無ければ一日を過ぐすこと出来ぬ費用なり、然るに前の所得賃銀四錢八厘に比ぶれば尙ほ五厘ほど軼過したり、嗟此五厘は生處なし、夫れ之を如何せん、彼等は將に言はんとすらん、富人動もすれば無禮にも吾等を稱して自暴自棄

の情民といへど、日に十一時間の労働、長き時間歟、短き時間歟、惰人の所爲歟、勉者の所爲歟、汝の業務に比しなは知れん、斯かる長時間息をもかかず牛馬の如く勤けども所得は所費を償ふに足らず、此差を賣めても償はせん、吾等は常に苦心しつゝ、南京米の代りに如何はしき残飯を買ひ、飲料水の代りに内井戸なる無代價の濁水を用ゆるなり、是れに由りて費用の超過を僅に節し止むるを得るなり、然る代りには腹、工合は南京米を炊き清水を飲みたるも同じ道理には行かざるなり、種々の病因は作るなり、斯くまで腹を殺し身を害して良民たるの名節を立つれば、富者は更に吾等を責め、惡食惡飲、コレラを媒介し、病毒を社會に播するなりと、去らばとて惡疫の媒介者たるを避けんと欲すれば、得失不償の哀しさは止むを得ずして、泛濫して法外の所爲に及ぶこと、は成り行くなり、生は我の欲するところ、義も亦我の欲するところ、兩つの者兼ねるを得ずは、生を棄て、義を取らんとは、孟先生のか言葉なれど、こは孟先生にして始めて出来る話なり、千百人中の十一なる士君子にして僅に實行せらるゝ罪柄なり、失禮ながら富者汝を牽來りて吾等に代らしめば、十の八九は泛濫人たらん、左なきも今の汝等社會は義理と私利との兼ねられぬ場合には此々として皆九大夫黨の大勢力を見る世なり、れは吾等の社會に於て法外人を出すは怪しむに足らず、之を汝等社會に比へば寧ろ寛かに恕す可きものなり、元來吾等社會と雖も誰か病毒を惡きとらん、誰か罪科を知らざらん、只た今日の現狀は罪科を犯すか病毒を媒するか、二者其一を避くるを得ず、斯かる境涯たらしめたるは全く汝等社會の所

葬式の費用

なり、と此語に對し富者の社會は果して如何の返答をか與ふるや、生活の困難斯くの如くなるに、尙一箇の彼等の經濟を撓動するものあり、开は彼等か同族の死亡に就き葬式に要する費用なり、彼等は  
一たび此凶禮を行ふに際すれば

- 四十錢の棺桶一箇
- 七十五錢の火葬料
- 二十一錢の法事料
- 三錢の讀經料
- 五厘の香花料
- 十四錢の昇き料
- 十錢の醫證
- 三錢の回向料

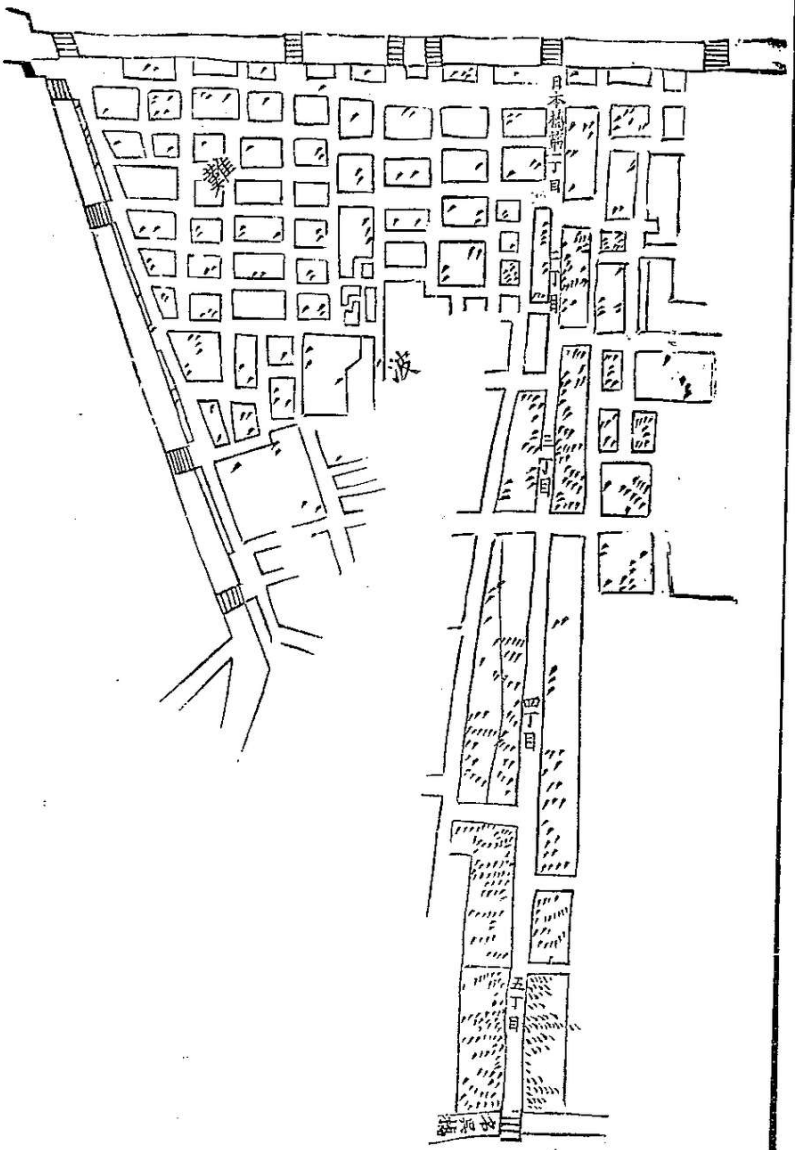
の一大費金を要す可し、斯かる大金を如何にして彼等は一時に支出し得る歟、四十錢の棺桶一箇は皆かんと欲するも省き得じ、七十五錢の火葬料は貧民證を官署より受くれば半額の特權を得ると雖ども尙ほ三十七錢五厘は逃る可からず、殊に二十一錢の法事料は白米三升を買ひ、合葬の人々に握飯一ツ宛を振舞ふ古來の國法なれば南京米を求るも之より減するわけに行かず、三錢の讀經料は仲間の鉢坊主を請し、之に對するお布施なり、五厘の香花も止む可からず、十四錢の昇き料は同じ長屋に其人なき時の沙汰なれば或は之を減するを得へし、それにして一圓の大金を要す、彼等の苦心思ふ可きなり、故に仲間一人の死亡者あれば彼等は其家族に向ひ、其死亡者を弔するより、先づ其要費の困難を弔するといふ、西人か喪家を見舞ふとき、多くは先づ其亡人の生前になせし生命保險の如何を問ふ

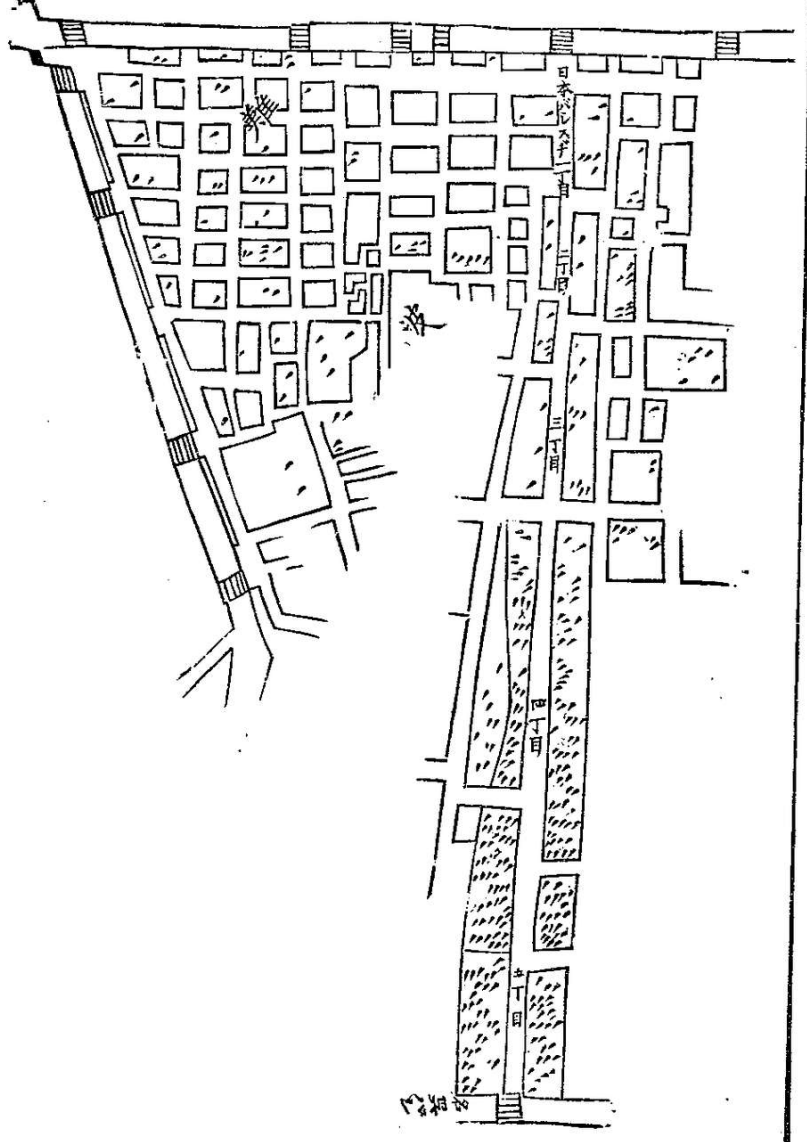
といふと一般の語柄なり、要費の困難斯くの如くなれば其一半は表家より貸與することにて、長屋中よりも二錢三錢宛の香花料を贈るに由り纔かに之を支ふといふ、然れども名護町中にての極貧の部分に於ては死者を漬物の古桶に詰め、夜中之を火葬場に昇き行き、置去る者尠からず、去ればや二千餘戸の饑寒窟、然も生者より死者の數尠かに超過したる饑寒窟より火葬料半額の特權を得る貧民證をも願ひ出づるは誠に妙しといふ、埋葬の困難斯くの如くなれば一般の社會には百方豫防して之を避

死ならコレ  
盗と疾  
病

げんと勉め居るにも係はらず、此社會にては死ぬなら虎列刺といふ語一般に流行より、是れ此惡疫に伴るれば葬式の世話もなく、火葬萬端の負擔もなく、又其費用を才覺するの困難事もなければなり、生計の費と實銀と得失常に償はず、是に於てか彼等の中、汎濫せざる者は疾に傾き、汎濫する者は盜に之く、盜惡む可し、疾畏る可し、彼等も亦皆其惡み且つ畏る可きを知る、故に二つの者若し皆之を避くるを得ば、彼等も衷心より之を避けんことを希へり、如何せん得失償はず、彼に傾かされは是に之く、今日の勢、其れをして止む能はざらむるなり、其の疾には、小兒の瘧瘧、眼病、殊に多く、就中一般の流行病及び傳染病は此一窟に入りて、其猖獗を極めぬはなし、醫師の說に由れば小兒の瘧瘧多き所以は、微毒性の遺傳と孕婦の惡食主因に居り、眼病多きは、矮室の中塵埃の空氣窒塞するに由るものなりと、而して此窟の流行病及び傳染病を流傳する迅速にして劇烈なるは、前にも嘗ていひしか如く、一には惡食、二には食時の無定限、三には薄衣、四には穢衣、五には住居の不衛生、六には醫

療の虧缺なり、加之生活困難の刺衝は終に死ぬら虎列刺の騒をなましむるに至り、さしも猛烈慘酷なる虎列刺をも左ほど恐れざるの境涯に瀕せしめたり、之に就き驚く可き一事あり、名護町一窟の虎列刺病は實に荼毒を極むるに由り、其裏長屋の一軒に之か發生を見る時は、當局よりは直ちに人を派し先づ長屋の總人員を點檢し、之に數日間の糧食を給與することを告げ、郵舎を隧道的出入口に派して嚴に他との交通を遮斷する事となり居れり、其間此裏に閉塞されたる者の危険さ幾何そ、常情よりして之を推せば、透もあらは逃れ出てたき心地なり、然るに遮斷後糧食を與ふる時に際すれば、初め點檢せし人員よりは數多の増殖を見ざるなしといふ、是れ其救助の糧食に預からん爲め、監者の眼を窃み、他より密に構内に潛み入る者あるに由るなり。情勢斯くの如くなれば其傳染の劇烈なる明治十九年には此窟のみに三百二十六人の患者を出したり、去れど是れは其歳周年の統計なり、本年に至りては初發八月一日より、予か虎隣館を辭去する前日即ち九月三十日まで僅々六十日間に、二百五十人の患者を生したり、因て此に其筋の手に成りたる大坂全市明治十九年の虎列刺發生圖中所謂名護町なる日本橋筋と、并に難波邊とを掲げ、讀者諸君に示す可し、圖中の黒點は各町區に一患者を出す、毎に一點を付して標出したるなり、抑々大坂市中に於て難波は概して虎列刺の最も劇烈なりし處と稱す、然るに今此の圖に就き日本橋筋と難波とを對比せよ、實に同日の談ならず、是れに由りて想見す可し夫の饑寒の一窟を、哀れ夫の饑寒の一窟を。





虎列剌の慘狀斯くの如し、嗟此年々之に仆るゝ幾百無告窮苦の民、之を救ふに術なき歟、而して其の  
去て盜に之く者亦實に尠ならず、其多くは飢渴の餘、凍寒の極、之を醫せんか爲め些鎖碎片の物を  
盜む者なり、故に小窃盜を殊に多しとす、然れども其中には兇惡癡狂狡獪の者あり、或は詐欺に出で  
或は強盜に出づ、地土の低き處諸流之に歸す、社會の下層に罪惡を犯す者の自から多きも亦勢其れを  
して、然らしむるなり、前例標點の法に據り明治二十一年に於ける名護町と難波との窃盜逮捕圖あり  
亦是れ當局の手に成りたるものなり、即ち取て左に掲ぐ

難波既に虎列刺の地と稱す虎列刺多き處は概して貧民多き處なり、貧民多き處は亦た窃盜多き處なり難波の盜を出すや大坂市中に最も多し、而して日本橋筋を對比し來れば復たひ難波の盜を説かず、左圖に點する處は單た窃盜の一種のみ而れども之れを數ふれば點又點積て二百數十に至れり、若し其れ窃盜に次ぎ名護町に最も多き難犯の一種、其他詐僞強盜を標出せば、名護町の圖上は黒點斑々、其の區畫たも辯する能はざるに至る可し、嗚呼言なるもの畏る可し、貧なるもの哀しむ可し。

名護町に於ける盜の數、盜の類、盜の因、業に已に之を述べたり、彼れ其由來する久しきをもて、彼等社會には盜業に關し無數の隱語を製出して、彼等の間に使用せり、故に偶々此社會に入り込むも、容易に其會話の意味を解するを得ず、予嘗て「貧天地」の中に於て職業字彙を著したることあり、今ま其例を起ひ此に隱語提要を掲げ、後の探檢者に便せんと欲す、想ふに予此隱語を一たび『日本』に出たし彼等の神秘を破りし後ち、再遊を名護町に試み、若し此隱語の評發者たるを覺られなば、長鏡、五右衛門、鼠小僧の輩の爲めに、身は開殺の禍を喫はんやも知る可からず、復た思へば是等秘密の隱語を知り得て物議頗に『日本』に掲げなば、讀者の爲めに居士は元と長鏡五右衛門の徒ならずやと疑はれんも亦知る可からず、去りながら聞て説かぬも剛腹なり、危険や嫌疑を顧みぬこそ探檢者の本意ならめさらば説かん、其の一二は

(サツケイ) とは警察を指す倒語なり。

## 隱語提要

(エキチャウ) とはサツケイの如く懲役の倒語なる新製の語なり。

(ボウツリ) とは巡查の事なり、靴聲のものをろく／＼なるに取れるなり。

(シケ) とは所得なきをいふ、霖雨の候漁撈の利なきに比するなり。

(マンカツ) とはシケの反對、所得ありて仕合善きを意味すなり、霖雨に對し天潤といふにもあらじ其語源詳かならず。

(ナダマハリ) とは窃盜に出て立つなり、危険の難を回るの意と知らる。

(マツサン) とは拘摸のいひなり、何の意歟。

(カマルチルコケル) とは共に入牢のいひなり、仆れ陥ぬるといふより來れり。

(買物。商買) とは首尾善く盜を爲すをいふ。

(夜商) とは夜中人家に忍び入るなり。

(袋) とは贖品を匿すの窩をいふ。

(宵ドロミ) とは初夜未だ鐘餘ぬ家に忍び入るなり。

(一夜作り) とは圃園の蔬菜を窃むものなり、蔬菜は元と日月を重ねて成るものなり、之を一夜に作るといふなり。

(押) とは強盜の事、押へて強奪するの意なり。

(ヤバスケ。ガス) 共に探偵の入りたるをいふ、ヤバとは疾しより來り、スケとは圓的の如し。ガスとは瓦斯燈の略、照射されたるをいふなり。

(イス) とは所謂系圖買なり、何の意味歟。

(ジンドウ。娘口説き) とは共に土藏に忍び入るなり、土藏の固き深窓の人に喩へたるは聞えたり、未だジンドウの義を知らず。

(空巢脱ひ) とは留守宅を窺ひ忍び入るなり。

(置き差し) とは店頭に革囊の類を掛り換ゆるなり、是れを置きて彼れと差し換ゆるといふなり。

(絞り揚げ) とは鹽中にある洗濯物を盗むなり。

(蜂追ひ) とは荷車を追ひ、往來にて積荷を盗むなり、蜂の蜜を追ふに比する歟。

(揚り) とは店頭の陳列品を攫みて逃れ走るなり、一攫揚々の義と知らる。

(蜂の巢) とは格子の外より竹にて物を挟み取るなり危険の度を蜂の巢を伺ふに比したるものならん。

其他鳥又は羽織の異名を青地といひ、衣類をヒラスケといひ、乾鰯を割松、松魚節を角といふなど枚擧するに遑ならず、盗に關係なければ之を略す、但し盗に關係なくして此に説明を要する數語あり其一はドヤ入りなり、ドヤ入とは彼等の社會中最劣等者を指稱するものにて、ドヤ／＼と無數の者の一

ドヤ入り

裏長屋

百軒長屋

借買淫

處に雜入し居るをいふ、元來普通の裏長屋は表屋の右側か左側かに隧道的出入口ありて出入の自由を保すれど、ドヤ入族に至りては、必ず表家の店頭より出入するの仕組となり居れり、去れば此一族に限りては出入表屋の店頭に由らざる可からず、一日屋賃の日掛を忘れは持主は其店頭に安坐し、出づるを見ても忘納を督責し、入るを見ても遠償を催促す、其うるさき言ふ可からざれど、屋賃の最廉なると、食器夜具類を貸與せらるゝ等の便あれば之に住む者甚だ多し、饑寒窟にても從來はドヤ入者とて大に之を賤しみしか、近來習慣風俗の最も卑陋なる西の人續々來りて此に住するより、ドヤ入賤斥論自然に廢れ、今は本來の仕人と西の人との區別をのみ精査辨析するに至りたり。長屋の序にて今更此他に異種の長屋を數ふれば其一は盲目長屋なり、四丁目に豆腐屋あり、其裏に列する十六戸許りの長屋あり、昔より喚て盲目長屋といふ、不思議にも何れの時も此に盲目者いと多し、今も其中の十二戸は皆眼に曰くある者のみなり、又其一は百軒長屋なり、此長屋は町の三方より出入するを得る一番なるか、其排置、錯雜混亂、不作法不規則いふ可からず、世呼て百軒長屋のガヤ／＼裏といふ、坂地の落語家講談師杯か物の不規則不順序を形容するには何時も引用の常套語となり居れるにても想見す可し。終りに臨み今更一つ醜穢卑陋のものを擧げん、开は即ち密買淫なり、此は虎列刺と窃盜との比例と全く反對にて名護町の方には至て少なく難波の方に極めて多し、蓋し名護町は同じ貧の世界中窮極困極の境に在れば、陌頭楊柳の下に立ちて、人の情緒を動かさしむる装ひをなすの餘地なきものと知



られたり、予一夕千日前の見物を兼ねて遊歩を試む、途中僅に三四町の間に、五十餘人の賣淫女を認めたり、認めたるのみかは其十九人は現に予か袂を曳き、か遊びます、など猫めたり、予嘗て東京にても之を觀たり、去れど東京にては月没柳暗往來人稀なるの時に於て偶々之れに會ふ、尙ほ羞惡の心を其振舞に見る所あり、然るに此所にては理髮店頭金モール肆前、等人の少しく集まる邊には三々五々群をなし、土方、車夫、番頭、商人等を見れば、肆然治聲を放ちて數歩の間之に追隨纏繞し、誘惑して止まず、其行爲忌み且つ厭ふ可し、然れども彼等も亦人の子なり、元ど好みて之れを爲すに非ず亦是れ窮男子の盜を爲すと一般、已むを得ずして此に出づるものなるを思へば豈惡む可きに非ずや、只た惡む可きは彼等の夫若しくは情夫なり、彼等に情を濶かしめ、已れば之に由て衣食し、賭博酒食の間其日を送るなり、而して其財源を濶らさしらんか爲め、夜は婦女と均しく路傍にありて探偵の探偵を爲すといふ、是をもて彼等の逮捕せらるゝ者甚た尠なし、是等を眞の砒民なる、変して而して働したき者なり、聞く此地の賣淫女の捕に就く者は醫員に命して一たび診驗せしむる由なるか、黷毒の氣なき者は極めて稀なりといふ、其下層社會に流毒する想ふ可きなり。

願れば予か此探偵を試みたるは炎威未だ去らず惡疫毒を逞するの時に在り、一たび筆を抽き「穢寒瘧」を草せしより知らず識らず回を重ねて二十一篇に至り、月を閲する三回に及びたり、炎威早く去り、毒疫漸く熾し重裘輕葛何れの時にか改まり、昨夜庭上を觀れば繁露地に滿ちて、桐葉枝を辭し、蟲聲全く死して、金風髪を動かす、坐ろに九秋の懷に堪えず、燈下に筆を投して此に是篇を絶つ、尙ほ憂ふ寒の將に彼の一箱に迫らんをすることぞ。

## 附 録

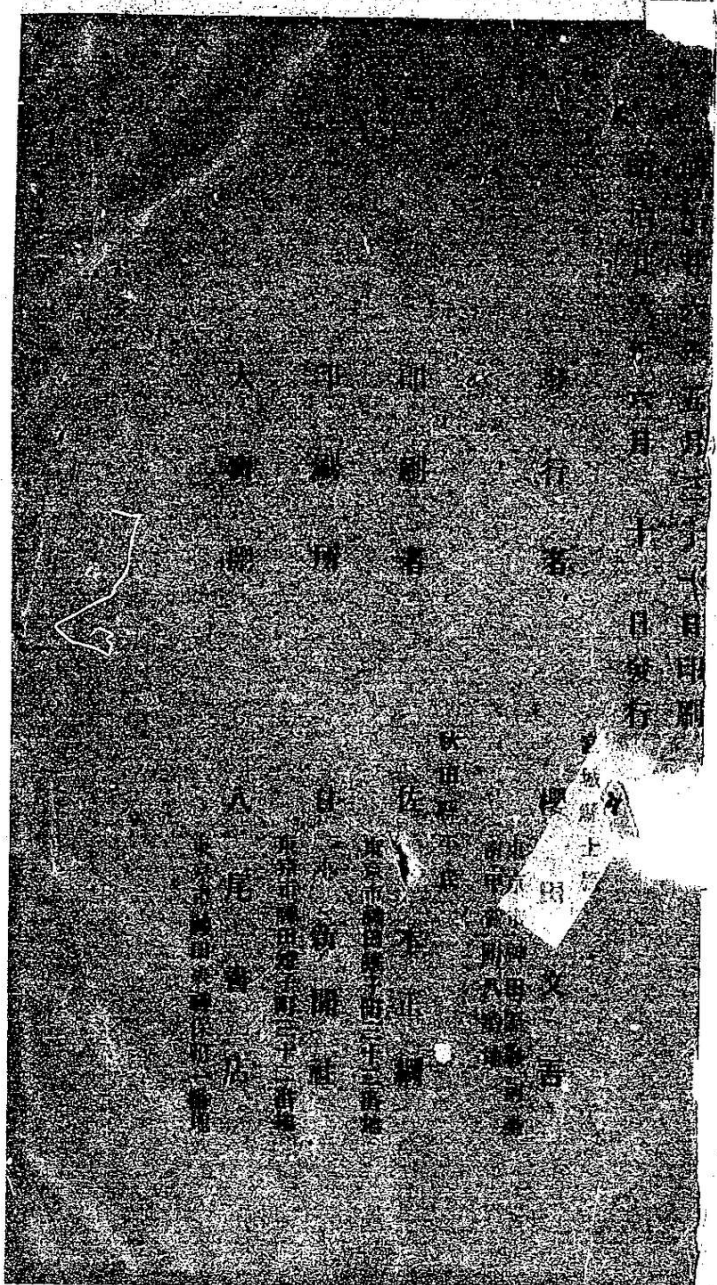
### 萬年町の歳首歳暮

臘虎跳る北海の端より鐘の住む琉球の隅に至るまで千里一風變りなく老も壽ふき幼も祝ふは正月元旦の佳節なり況して本年の元旦は風も静かにならの葉の枝もならさぬ長閑さに梅の花さへ咲き満て目出度御世の初春々と祝はぬものなき筈なるに此の最上吉日を以て無二の悪日となし此最大佳節を以て唯一の大厄日と爲すもの、我か四千萬の同胞中に一社界を爲せりと聞かば豈に慘然たるものなからんや嗚呼饑寒窟の憐なるは何時にても憐ならざるはなし然れども彼等が年の暮年の首ほど憐れに且つ悲しきはなし今饑寒窟の總代人として爰に下谷萬年町なる一人を引出し夫が年末年首の實況を記さん抑々饑寒窟の一般の景況は十二月に入りて爰に初しめて諸事取引の活潑となるを常とす然れども其取引の活潑なりと云ふは彼等が營業の取引の活潑なるに非ずして實物の出入の頻繁となり行くに在り試みに彼か買物の種類を見るに衣類夜具は云ふも更らなり鍋、釜、飯櫃、古下駄凡そ長厚なる物質と云へば如何なるものにも其の材料に併せらるゝなり故に其の金額も亦た之を大にして七十五錢より大なるはなく甚しきは一錢五厘、二錢三錢の間に出入するものあり而して其鍋其釜其下駄は必ずしも二通りつゝ有せるに非ず現に自己が用ひつゝあるものを典するなり假令ば妻の衣服を典せんと欲せば女房は

終日夜具を引被つて留守を守り亭主は之れを資本として其職に従ふなり故に亭主先生の志聊かにも  
 翻歸し事業一たび失敗せんか女房は何日間にも何週間にも一枚の夜具中に籠城せざる可らざるな  
 り鍋、釜の類は大抵質入となれるを通例とす其の偶々之れあるは例外なり故に十軒の長屋に一個の鍋  
 釜を共有して之を使用せり又た一ヶ月の中少なくとも廿回の拘留を質屋庫中に受くるものは夜具、布團  
 なり是れは朝疾く起き出て之を典し晩に利純を得て之を受け戻すなり出沒變化實に測るべからず然  
 れども是尙ほ言ふに足らざるなり甚たしきに至ては飯の入りたる儘なる飯櫃を以て金を借ることあり  
 是れ典物中の好價物なりと云ふ其法朝方に炊きて食ひ残したるものを櫃のまゝ典するものにして此は  
 質屋に托するにあらで條件付即ち買戻の約定にて古道具屋に賣却するものなり賣主は此金を資本と  
 して一生懸命に働き利あれば始めて買戻す仕組にして其の買戻期限は一日或は半日とし買戻料は十  
 錢に就き六七厘の相場なり此等の車柄は獨り年末にのみ行はるゝにあらざるも年末に至りて殊に頻繁  
 を極むるを以て此に掲けたるなり斯の如くして大晦日に至れば家主は一軒毎に長屋を廻りて屋賃の催  
 促を爲す其嚴格なる通常月末の比にあらす屋賃は日掛月掛の二種ありて少き者は三十錢位より多きは  
 二圓四十錢位の延滞ありといふ彼等は自己の食を減するも屋賃の幾分かは是非才覺せざるべからず然  
 らされは家主は其の長屋の者の僅か斗りなる道具をば路次に投げ出して外より戸障子を釘付けにし又  
 た再び入ることを許さず此強硬的店立を命せらるゝもの年末は殊に多しとかや特に昨今は木賃宿を減

却せられたるを以て此處を追拂はれたる時は何れの家主も之を入るゝことなければ勢ひ立の坊たらざ  
 るべからず故に彼等は種々の才覺を爲し十錢或は二十錢を拂ふて少しく猶豫を請ふなり斯る有様なれ  
 ば饑寒瘧の年末歳首とて別に相互に歳暮年玉杯の贈物を爲すことなし只た十軒の長屋ありとせば大晦  
 日には一軒六厘宛を醸出して砂糖一袋を家主に贈ると常例なり又非常に親しき間柄なれば目刺魚五枚  
 若しくは牛蒡人參二本位の進物を爲すことあり然れども彼等は一般に贈答廢止會の會員たるは疑ひな  
 し彼等にも自然二三分段ありて富者は餅を搗くとあり其量多きは五升少きは一升なり其質とて獨り端  
 のみにあらず粟、豆、粉米杯打ち混ぜたるを多しとす曰は煎餅屋或は團子屋より借るゝ習ひなるも僅  
 か二日計の間なれば望むの候補者多く近所にては間に合はざること往々之れあるを以て遠く御徒士町  
 或は清島町邊より持ち來るとあり之も一長屋にて借切る譯にはあらずして六七軒聯合にて借入れ一同  
 にて三錢五厘位の手拭一筋を體に遣るなり是れ此處の大典とす又萬年町の大通には他所の如く毎年大  
 晦日の晩には露店を開きてのし餅を商ふ者あるも其相場は糶一升の値金九錢を出して漸く益大のし  
 餅一枚を得るとなり然るに自分に之を掲げは殆んど一枚半を得へし又中位のお餅餅は一重一錢五厘の  
 相場なれば矢張一升の値金にて六重を得るに過ぎざるも自分の白にては十重を得るといふより彼等は  
 二切三切の餅を買ふは兎も角一升位の餅は何分自分の手にて搗くを便利と爲すと云ふ去れば大晦日も  
 元日も味噌豆の皿にて雑煮を食ふは特例にて先三四人の家族にては八厘位の鹽麴一初と澤庵漬の一本

を買ふて飯を喫するは先づ上の部なり中には粉米と真米とを等分に爲して之を釜に入れ其飯に成る頃鹽麩の頭を飯の上に載せて炊く者もあり斯くすれば別にお菜の用意なくも鹽麩の鹽の加減にて旨く出来るなりと此等も等しくお馳走の中にて其下等に至りては蕎麥の下粉或は焼芋杯にて間に合せ居るなり夫妻とも柳原物の一枚も着一錢三厘の湯錢を投して体を清めて年を迎ふか如きは考ふべからざることとなり是か萬年町の年末及歳首の景況なり概して大晦日元日二日三日の四日間世上一般に業を休むこと例なるを以て車夫屑拾ひ等の外其下に就て勞役する所の彼等も等しく業を廢せざるべからず彼等の業を休むは彼等に於て擧る好む所ならん然れども業を休むか爲めに食を得ざるを如何せん加之債鬼は假令資主の業を休み食を得さればとて猶豫するものにあらざれば年末と歳首の到るを恐るゝことお幣家の文字の惡日鹿の惡日を待つに異ならざる亦た已むを得ざるなり(明治廿四年一月五日「日本」)



を買ふて飯を喫するは先つ上の部なり中には粉米と眞米とを等分に爲して之を釜に入れ其飯に成る鹽麴の頭を飯の上に載せて炊く者もあり斯くすれば別にお菜の用意なくも鹽麴の鹽の加減にて旨く出  
 来るなりと此等も等しくか馳走の中にて其下等に至りては蕎麥の下粉或は焼芋杯にて間に合せ居るな  
 り夫妻とも細原物の一枚も着一錢三厘の湯錢を投して体を清めて年を迎ふか如きは考ふへからざるな  
 どなり是か萬年町の年末及歳首の景况なりにして大晦日元旦二日三日の四日間は一様に業を休む  
 こと例なるを以て車夫屠拾ひ等の外其下に就て勞役する所の彼等も等しく業を廢せざるへからず彼等  
 の業を休むは彼等に於て寧ろ好む所ならん然れども業を休むか爲めに食を得ざるを如何せん加之債鬼  
 は假令貢主の業を休み食を得されはとて猶豫するものにあらざれば年末と歳首の到るを恐るゝことお  
 幣家の文字の悪日鹿の悪日と待つに異ならざる亦た已むを得ざるなり(明治廿四年一月五日日本)

明治廿六年五月三十日印刷  
 明治廿六年六月十日發行

發行 者

文 吾

東京区神田區駿河臺  
 南甲賀町八番地

印 刷 者

秋田縣平民 佐 木 正 綱

東京市神田雉子町三十二番地

印 刷 所

日 本 新 聞 社

東京市神田雉子町三十二番地

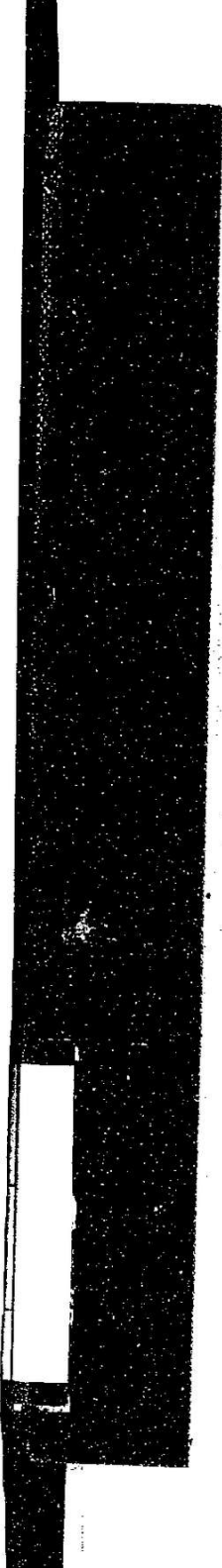
大 賣 捌

八 尾 書 店

東京市神田表神保町一番地

4M25

1870  
1871  
1872  
1873  
1874  
1875  
1876  
1877  
1878  
1879  
1880  
1881  
1882  
1883  
1884  
1885  
1886  
1887  
1888  
1889  
1890  
1891  
1892  
1893  
1894  
1895  
1896  
1897  
1898  
1899  
1900  
1901  
1902  
1903  
1904  
1905  
1906  
1907  
1908  
1909  
1910  
1911  
1912  
1913  
1914  
1915  
1916  
1917  
1918  
1919  
1920  
1921  
1922  
1923  
1924  
1925  
1926  
1927  
1928  
1929  
1930  
1931  
1932  
1933  
1934  
1935  
1936  
1937  
1938  
1939  
1940  
1941  
1942  
1943  
1944  
1945  
1946  
1947  
1948  
1949  
1950  
1951  
1952  
1953  
1954  
1955  
1956  
1957  
1958  
1959  
1960  
1961  
1962  
1963  
1964  
1965  
1966  
1967  
1968  
1969  
1970  
1971  
1972  
1973  
1974  
1975  
1976  
1977  
1978  
1979  
1980  
1981  
1982  
1983  
1984  
1985  
1986  
1987  
1988  
1989  
1990  
1991  
1992  
1993  
1994  
1995  
1996  
1997  
1998  
1999  
2000  
2001  
2002  
2003  
2004  
2005  
2006  
2007  
2008  
2009  
2010  
2011  
2012  
2013  
2014  
2015  
2016  
2017  
2018  
2019  
2020  
2021  
2022  
2023  
2024  
2025





369.15

D15-*h*

039879-000-6

369.15-D15

貧天地餓寒窟探檢記

大我 居士/著

M26.6

BDB-0159



